

# 速報！京都発掘 恭仁宮・長岡京・平安京外縁

## 1. 恭仁宮の構造を探る－最新の発掘調査から－

京都府教育庁指導部文化財保護課

技師 中居和志 P 1 ～ P 8

## 2. 長岡京内の漆工房の調査－長岡京跡左京第 557 次調査を中心に－

公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター

主査 木村泰彦 P 9 ～ P22

## 3. 平安京北郊でみつかった居館－植物園北遺跡の発掘調査から－

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究埋蔵文化財センター

主任調査員 高野陽子 P23 ～ P36

日 時：平成 26 年 3 月 8 日（土） 午後 1 時 30 分～ 4 時 30 分

場 所：長岡京市産業文化会館 1 階 大会議室

主 催：京 都 府 教 育 委 員 会

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

共 催：長 岡 京 市 教 育 委 員 会

公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

# 恭仁宮の構造を探る

## － 最新の発掘調査から －

京都府教育庁指導部文化財保護課

技師 中居和志

### 1. はじめに

京都府内には、古代に3つの都が造られました。およそ1200年前の延暦13年（794）に京都市に平安京が、その10年前の延暦3年（784）には向日市・長岡京市・京都市・大山崎町にかけて長岡京が造られました。

恭仁京は、さらにその45年ほど前の天平12年（740）、奈良時代の中ごろに、聖武天皇によって木津川市に造られた都です（第1図）

恭仁京の中心である恭仁宮には、天皇が暮らし様々な儀式などが執り行われた内裏、政務や国家の儀式が行われた太極殿や朝堂院、さらには官人が仕事を行った役所（官衙）など国の中でも最も重要な施設が造られていました。しかし、天平16年（744）には、都は大坂の難波宮へと移り、さらにその後再び奈良の平城京へと戻されることとなりました。恭仁京は国の首都としての役目を終えた後、天平18年（746）には、その中心部が山背（山城）国分寺へと造り替えられました。



第1図 古代の都の位置

恭仁宮跡では、昭和 48 年度から京都府教育委員会が、そして昭和 61 年度からは、旧加茂町教育委員会（現木津川市教育委員会）と京都府教育委員会が協力して発掘調査を行ってきました。

## 2. 恭仁宮はどんなところ？（第 2 図）

### ○恭仁宮の範囲（宮大垣<sup>みやおおがき</sup>）

恭仁宮は、東西約 560 m、南北約 750 m の範囲を高い土堀（築地堀<sup>どべい ついじべい</sup>）で囲まれていました。平城宮と比べると 3 分の 1 程度のコンパクトな宮でした。宮城への出入口となる門は、いくつか設けられていたと考えられていますが、東南隅付近に作られた東面南門のみが見つかっています。

### ○大極殿地区

大極殿<sup>だいごくでん</sup>は、天皇が儀式を行うための大極殿がある、最も重要な地区でした。大極殿は、東西が約 45 m、南北が約 20 m もある大きな建物で、現在も恭仁小学校の北に高さ 1 m 以上の大きな土壇<sup>どだん</sup>が残されています。

恭仁宮の大極殿とその周囲に巡らされた回廊<sup>かいろう</sup>（歩廊<sup>ほろう</sup>）については、『続日本紀<sup>しよくにほんぎ</sup>』天平 15 年 12 月 26 日の条に、「平城の大極殿并に歩廊を壊ちて遷し造る」と記されています。平城宮跡と恭仁宮跡での継続的な発掘調査によって、この記載が史実であったことがわかっています。なお、平城遷都 1300 年祭を契機に復元された平城宮の大極殿は、恭仁宮の大極殿を参考に復元されたものです。

### ○内裏地区

内裏は、天皇が住まいし、様々な儀式などが行われた場所です。恭仁宮跡では、大極殿の北側に、東西に 2 つ並ぶ「内裏西地区」・「内裏東地区」があります。「内裏西地区」は、周りが全て板堀（掘立柱堀<sup>ほったてばしらべい</sup>）で囲まれた、東西約 98 m、南北約 128 m の大きさです。「内裏東地区」は北側が板堀（掘立柱堀）で、残る南側、東側、西側は土堀（築地堀）で囲まれた、東西約 109 m、南北約 139 m の大きさで、「内裏西地区」より一回りほど大きく造られていることがわかっています。

平城宮などでは、内裏の区画は 1 つだけで、恭仁宮のように 2 つの区画がある宮はありませんでした。しかし、最近の調査で、紫香楽宮<sup>しがらきのみや</sup>も同じような構造を持っている可能性があることがわかってきています。

## ○朝堂院・朝集殿院地区

朝堂院は、貴族や役人が儀式などのために出仕するところ、そして朝集殿院<sup>ちようしゅうでんいん</sup>は、その前に彼らが集まるところで、周囲は板塀（掘立柱塀）で囲まれています。朝集殿院の区画南辺には、出入口となる朝集殿院南門も見つかっています。平成 24 年度からは、朝堂院の区画内部に建てられていた建物跡の調査がはじまり、朝堂に相当する建物が初めて見つかりました。

### 3. 平成 25 年度調査の成果（第 3・4 図）

朝堂院内では、平成 21 年度までの調査によって、南辺と東西辺区画の位置が確定しています。平城宮跡の朝堂院では 12 棟の建物が、難波宮跡では 8 棟の建物が整然と配置されていることがわかっていますが、恭仁宮では平成 24 年度に初めて朝堂院の南西端に位置する建物が見つかりました。

今年度は、第 1 トレンチを朝堂院にどのような建物が建てられているのか解明することを目的として、第 2 トレンチを朝堂院の西辺を区画する掘立柱塀を確認することを目的として設定しました（第 3 図）。この場所の北側には、平成 22 年度の調査によって山背国分寺の南端を限る築地塀に伴う溝が検出されています。調査の結果、どちらのトレンチからも恭仁宮期の遺構は見つからず、山背国分寺に関連する遺構が見つかりました。

朝堂院の南西側では、平成 24 年度の調査で柱穴が 23 基見つかりました。これらの柱穴の配置から、東西 8 間、南北 6 間の掘立柱建物になる可能性が指摘されていました。今年度は、平成 24 年度の調査で見つかった柱穴が本当に 1 つの建物になるのか、また建物を構成する柱がどのような配置になるのかを解明することを目的として、第 3 トレンチを設定しました（第 4 図）。

調査の結果、新たに柱穴 5 基（柱穴 24～28）が見つかりました。柱穴 24～27 の大きさは、1 辺約 1 m、深さ約 1 m の大きさです。一方で柱穴 28 は、1 辺約 0.5 m、深さ約 0.5 m と他の柱穴の半分の大きさです。柱穴 27・28 の間隔は 8 尺（約 2.4 m）、他の柱穴の間隔 10 尺（約 3 m）に比べてやや狭くなっています。さらに、柱穴 28 の西側には、幅 20cm の東西方向の溝 3 が見つかりました。柱穴は、いずれも不整形な方形となっており、断面観察の結果、柱が抜き取られていることがわかりました。そのため、この建物は最終的に解体されたと考えられます。また、柱穴の抜き取り痕跡から瓦が出土していることから、少なくとも一部には瓦が用いられた建物であった可能性が考えられます。

平成 24 年度の調査区では、西端の柱列に近接して南北方向の溝 2 が見つかりました。今回検出した溝 3 とあわせて考えると、外周の柱列が基壇<sup>きだん</sup>（建物の建つ土台）となり、内



側に南北5間×東西6間の建物と考えるのが最も整合性のある案と考えられます。また、基壇の外装を構成する柱穴や溝からは、石材などの部材が見つからないことから、この基壇の外装は木製である可能性があると考えられます。

木製の外装基壇は、近江国庁や遠江国分寺、三河国分寺、飛鳥稲淵宮とされる稲淵川西遺跡で確認されています。いずれも金堂などの主要な建物に用いられている点が特徴的です。

#### 4. まとめ

##### ○今年度の調査でわかったこと

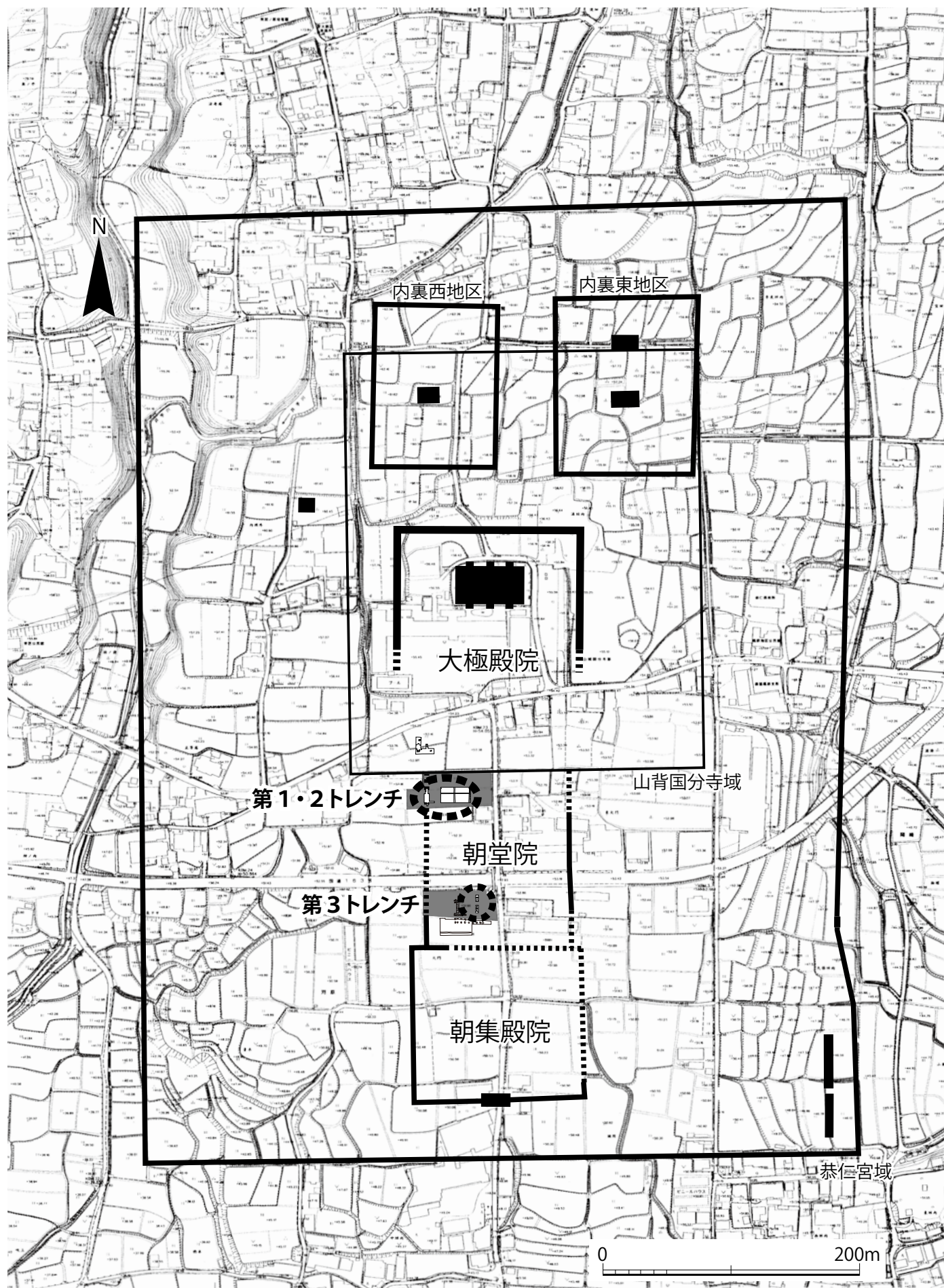
- ・ 恭仁宮跡ではじめて見つかった朝堂建物の規模がわかりました。
- ・ 朝堂院には、木製の基壇をもつ1棟の建物がある可能性が高まりました。
- ・ 朝堂院の北西部は、恭仁宮期の遺構が大きく削られていることがわかりました。

##### ○今回の調査成果の意義

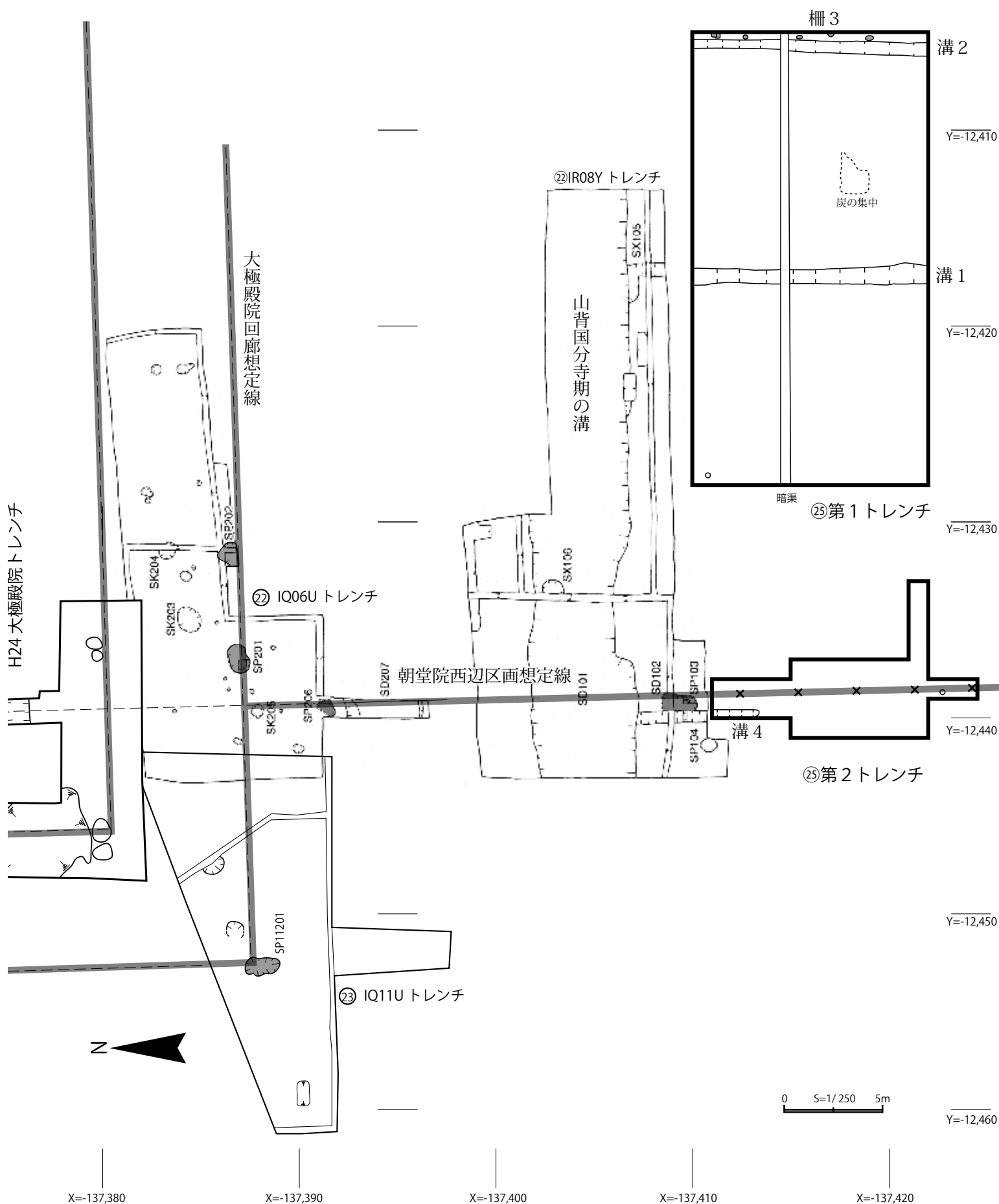
- ・ 朝堂建物の規模は大きく、柱穴の規模からみても本格的な建物であったことがわかりました。その結果、恭仁宮の朝堂院の内部構造を解明するきっかけとなりました。
- ・ また、朝堂院の構造が明らかになれば、他の宮との設計の違いや、朝堂院の性格や機能は何かなど、多くの議論を具体的に検討することが可能となります。

##### ○今後の課題

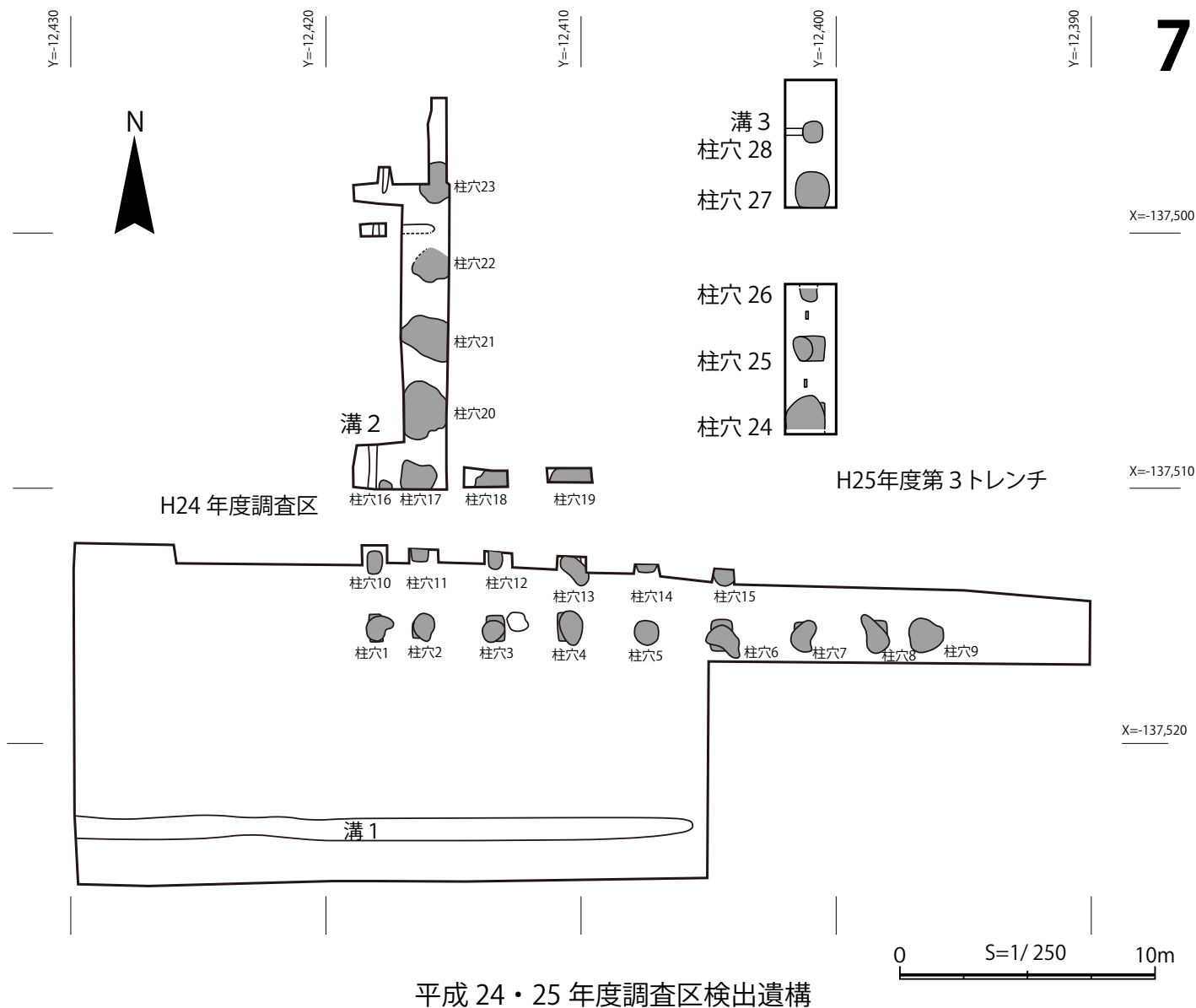
- ・ 正方形に近い朝堂は他の宮都で例がなく、建物の構造を解明するために柱の配置をさらに解明する必要があります。
- ・ 木製の基壇とすれば、どのように建物の周囲を巡っているのか、明らかにする必要があります。
- ・ 朝堂院の北西部において、恭仁宮期の地面が削られたのが国分寺の創建期とすれば、大規模な地形改変が必要となった意味を解明する必要があります。



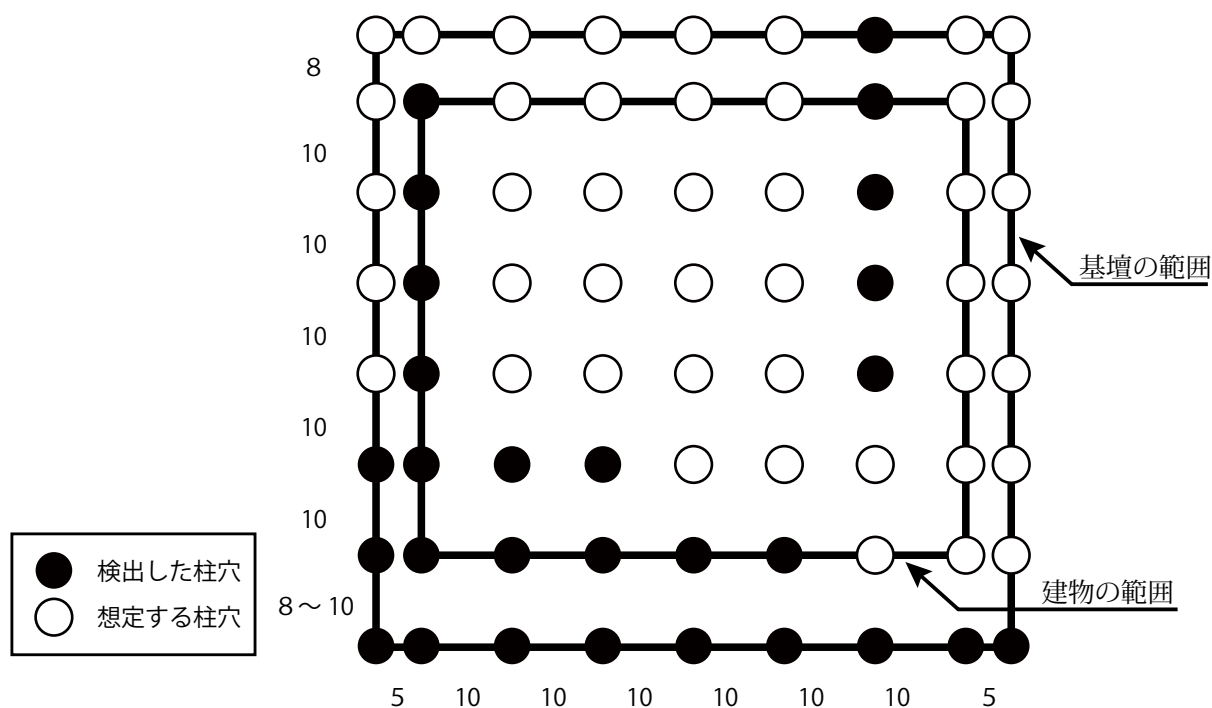
第2図 恭仁宮跡全体図及び今年度調査対象地位置図(1/4,000)



第3図 第1・2トレンチ平面図 (1/250)



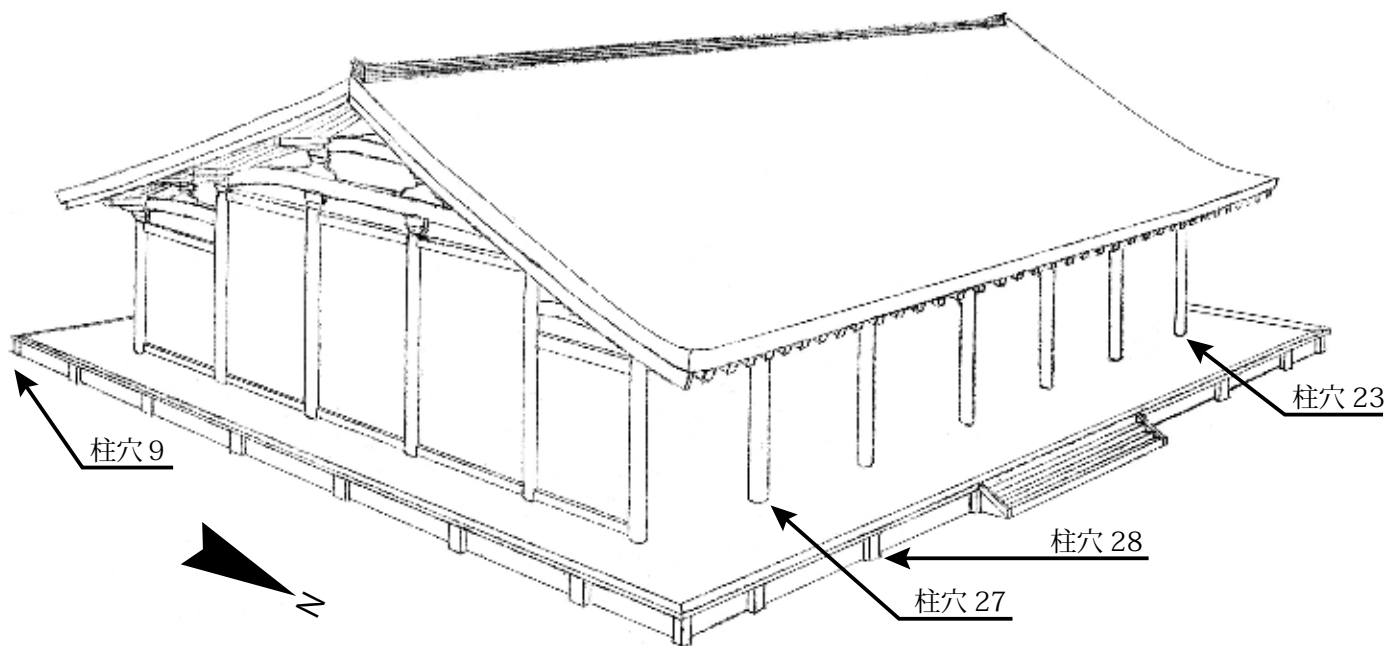
平成 24・25 年度調査区検出遺構



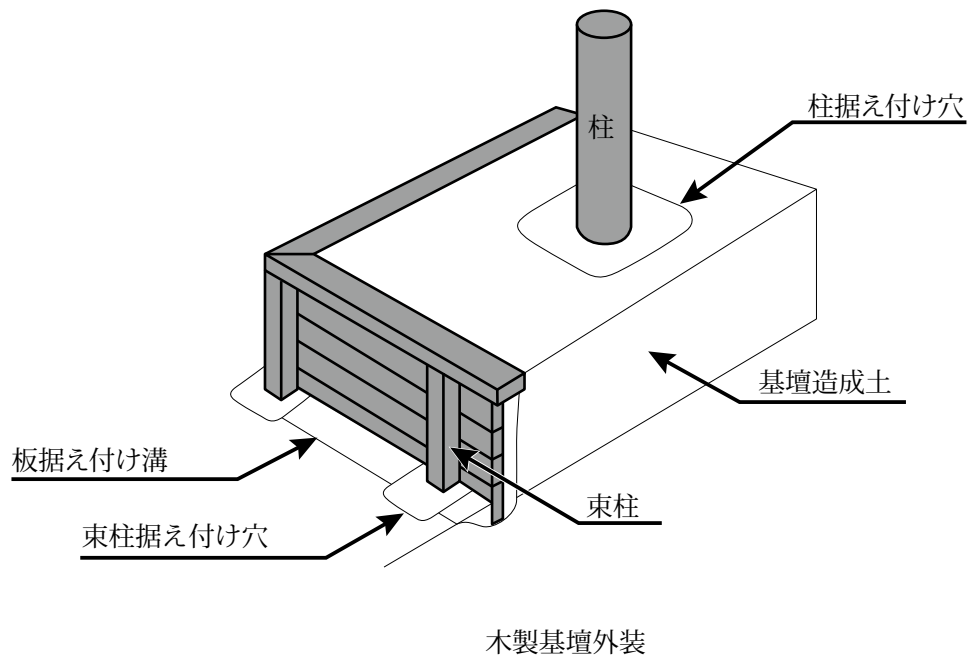
検出建物柱配置想定 (数字単位は尺)

第4図 第3トレンチ平面図と建物柱配置想定 (1/250)





朝堂建物のイメージ図（北東から）



第5図 朝堂建物と木製基壇のイメージ図

# 長岡京内の漆工房の調査

## － 長岡京跡左京第 557 次調査を中心に －

公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

主査 木村泰彦

### はじめに

今回報告いたしますのは、店舗建設に伴って実施した長岡京跡左京第 557 次調査の成果についてです。場所は J R 長岡京駅の東側、国道 171 号線との合流点付近で、住所は長岡京市神足大張 12 - 1 他になります。ここは長岡京の復原図では左京六条一坊十三町に相当する場所で、同時に東西の六条大路と南北の東一坊大路が交差する場所にも当たっています。調査地周辺ではこれまで長岡京の遺構・遺物がたくさん見つかっていて、長岡京内でも造営がかなり進展していた一帯だったようです。調査は 2013 年 3 月 4 日から 7 月 31 日まで行い、6 月 29 日に現地で説明会を開催しました。

### 見つかった遺構と遺物

調査の結果、ほぼ当初の予想通り六条大路と東一坊大路の交差点および左京六条一坊十三町の宅地南東部分が見つかりました。このうち大路同士の交差点は六条大路の北側溝と東一坊大路の西側溝部分の検出でした。これは長岡京の大路は幅が 24 m（八丈）あるため、反対側の側溝は今回の調査地の外に出てしまうからです。しかし片側だけでもいろいろなことが判明しました。

**六条大路北側溝 SD25** 調査地の南西部で見つかった、幅 1 ～ 1.5 m、深さ約 0.5 m の溝です。約 10 m 分が見つっていますが、南北の東一坊大路西側溝 SD17 と「T」字状に接続した部分より東には延びていません。このことは南北方向の東一坊大路の排水が優先されていたということになります。

これまでに長岡京では、大路同士の交差点は 10 か所で確認されています。このうちこのような優先関係が明確なものとしては、左京域で東一坊大路と三条大路・四条大路、東二坊大路と一条大路・二条大路があり、いずれも東西の大路の排水が優先されているこ

とが判っています。また右京域でも西二坊大路と三条大路の交差点では東西の大路の排水が優先されていて、長岡京では東西の大路を優先させるのが基本的な法則とみられていました。しかし今回の発見によりこのような優先関係を決定する要素が、土地の傾斜や側溝を流れる水量、周辺の土質など自然条件による可能性も考えられるようになりました。

ちなみに大路と小路の交差点の場合は、大路が優先となっており、小路同士の場合、優先状況は東西・南北さまざまです。やはり上で述べたような自然条件のためとみられます。

**東一坊大路西側溝 SD17** 調査地の西側で約 45 m にわたって検出されました。幅約 2 m、深さは 0.7 m で、<sup>じょうぼうそっこう</sup>条坊側溝としてはかなり規模の大きなもので、やはり周辺での水量が多かったのでしょう。先に述べた六条大路北側溝 SD25 との交差点より南では、六条大路北側溝の排水が加わるための対策でしょうか、さらに溝幅が広がっていて幅 3 ～ 3.5 m となっています。この溝が広がったか所では、木材の集積と<sup>くい</sup>杭が見つかっていて、簡易な橋状の施設が存在したようです。またこの側溝が徐々に埋まって行く過程で大型の石が溝内の数か所に見受けられました。ひょっとすると飛び石のように利用したのかもしれませんが。

さらに木材集積か所の近くからは牛と馬の骨がたくさん見つかりました。文献には牛や馬を殺して漢神（外国の神）に捧げていたことが記されているので、このようなまつりが行われていたとみられます。骨の周囲からは<sup>もっかん</sup>木簡が 1 点出土していて、<sup>つけふだ</sup>付札とみられますが現在解説中です。これ以外に調査地から木簡は見つかっていません。このほかに交差点の北側では<sup>どうせん</sup>銅銭が 10 枚（<sup>わどうかいちん</sup>和同開珎・<sup>じんこうかいほう</sup>神功開寶・<sup>まんねんつうほう</sup>萬年通寶）まとまって見つかっていて、こちらにもまつりが行われたあとのようです。溝内からは土器も多数出土していますが、どれも破片ばかりでした。

**宅地内溝 SD15・24** 左京六条一坊十三町の宅地の南東部を区画する溝です。東側を区画している溝 SD15 は、東一坊大路西側溝から 3.3 ～ 3.8 m 西側に掘られています。東側の<sup>みぞかた</sup>溝肩は直線ですが、西側の宅地側の溝肩は南に行くにつれて広がり、かなり崩れた形をしています。南側を区画する溝 SD24 も同様で、南側の肩は、六条大路北側溝から約 4 m の距離で直線に掘られているものの、北側は崩れた形をしています。これらをみると大路に面した部分はしっかりと作られていて、<sup>つじ</sup>築地などの施設が存在したようにも見えます。しかしこの部分にある溝や小穴からは、長岡京期の遺物などが出土していて築地があったとは思えません。もし崩れていたとしても、宅地内の溝や条坊側溝内に瓦や築地の土などが見当たらないので、やはり築地は作られていなかったようです。ひょっとすると、工事を始める前に平安京への引っ越しが決まってしまったのかもしれません。

ちなみにこの場所にある小穴のひとつから<sup>しっぴばこ</sup>漆皮箱が見つかっています。これは動物の皮

を型にはめ込んで箱形を作り、漆<sup>うるし</sup>を塗って固めたもので、正倉院<sup>しょうそういん</sup>には多くの類例が残されています。おそらく長岡京での発見は初めてだと思われます。このようなものが残されているのも築地が存在していなかった証拠かもしれません。

この宅地内の区画溝<sup>くかくみぞ</sup>からは多くの遺物が出土しています。圧倒的に土師器<sup>はじき</sup>や須恵器<sup>すえき</sup>といった土器類が多いのですが、条坊側溝<sup>じょうぼうそっこう</sup>から出土した遺物と比べると、完全な形に近いものや破片の大きなものが多いのが目立ちます。ただし釉薬<sup>うわぐすり</sup>をかけたような高級なものはみられませんでした。この中で特に注目されるのは漆紗冠<sup>しっしゃかん</sup>と呼ばれるかぶりものが4点も出土した点です。これは粗い網目状の編み物を袋状に綴じ合わせて、黒漆<sup>くろうるし</sup>を塗って仕上げたかぶりもので、貴族が着用するものでした。文献では天武天皇十一（682）年六月にこれを初めて着用したとされ、正倉院にも断片が残されています。壊れやすく残りにくいことから遺跡からの出土例は非常に少なく、平城京でも類例は多くありません。今回一度に4点も出土したのは大変珍しく、貴重な例といえます。このうちの1点はひしゃげていますが12cm×15cmの範囲で上部の丸い部分が残っていて、ある程度形が判るものです。他の3点の残りはこれほど良くありませんが、出土場所が離れていて、目の粗さなどが異なっていることから別のものだと判ります。

さて、先ほども述べたように漆紗冠は貴族がかぶるもので、4点も一度に出土したこの場所ははたして貴族が住んでいたのか？という点、そうともいえないのです。

まず、今回の調査地である左京六条一坊十三町という場所です。都の中ではかなり南に位置しており、都の中では位の<sup>くらい</sup>高い人ほど北側に大きな屋敷を構え、南に行くにつれ、位の低い人の屋敷地へととなっていくことから考えると、ここは余りふさわしい場所とはいえません。また土器に高級品がないことや、木簡<sup>ぼくしん</sup>や墨書土器<sup>ぼくしよどき</sup>など文字資料が非常に乏しいことも位の高い人の屋敷とは思えません。

そこで他の遺物に目を移すと、漆のしみこんだ紙や、漆の容器に使われた壺<sup>つぼ</sup>、漆のパレットとして使用された土器などが注目されます。つまり先に紹介した漆皮箱、漆紗冠、そしてこれら漆の付着した遺物から、ここに漆製品<sup>うるしせいひん</sup>の工房があったと考えられるのです。

## 周辺の調査地と東市

実は今回の調査地の南西で以前に行った左京第204次調査では、黒漆塗りの立派な合子<sup>こうす</sup>が出土しています。同時に見つかった建物はいずれも小規模で、下級官人<sup>かきゅうかんじん</sup>の屋敷とみられることから、高級な漆器<sup>しつき</sup>の合子とのギャップが調査者の頭を悩ませていました。また同じく南東で行われた左京302次調査では、漆に含まれた不純物を取り除くための漆濾しの繊維や漆のついた土器が出土していて、工房の存在はある程度推定されてはいました。今回

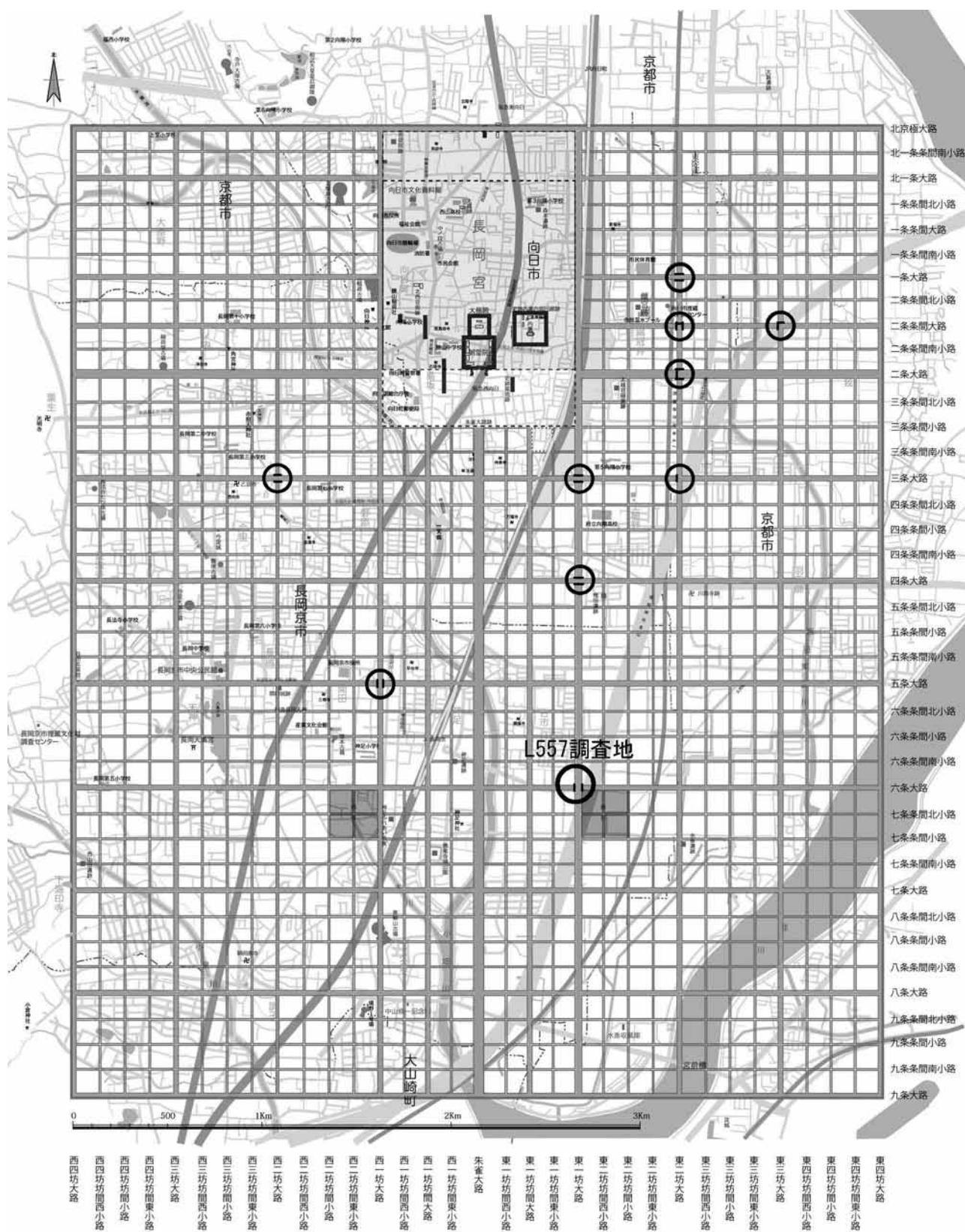


の調査で高級な漆皮箱や貴族の使用する漆紗冠が出土したことにより、これらが漆工房というキーワードで結びつけられたといえるでしょう。

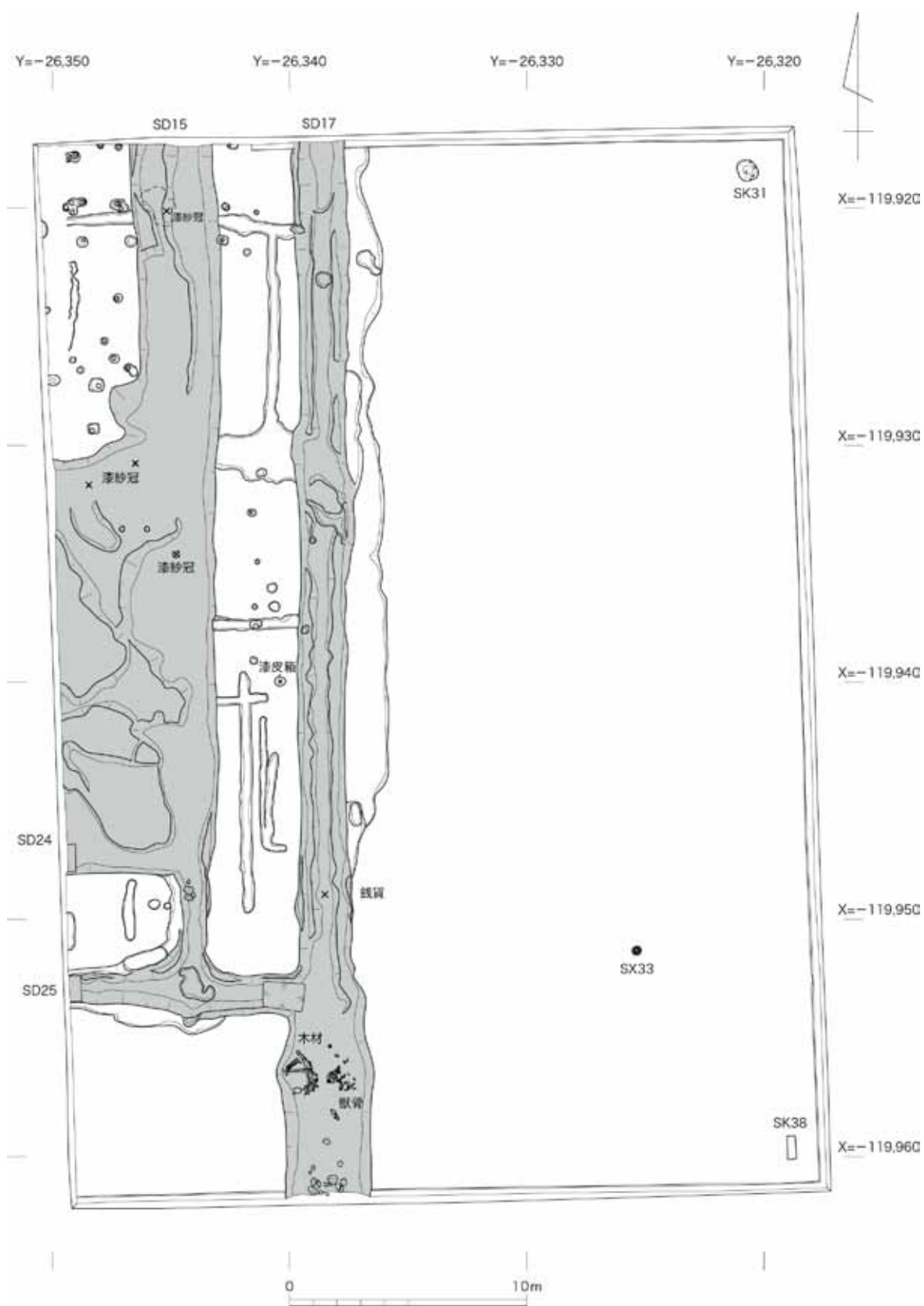
平城京での出土例をみると、漆紗冠は宮と主に左京域に散在して出土していますが、その一方で漆関係の工房跡も見つかっていて、そこでも漆紗冠のほかに漆皮箱や漆器、漆濾しの繊維など同じような製品が見つかっています。ここで注目されるのは漆工房と漆紗冠の検出が重なっているのは、右京・左京共に<sup>にしいち</sup>西市・<sup>ひがしいち</sup>東市の隣接地であるという点です。おそらく市の周辺では材料などの入手が容易であることや、製品の売買にも便利であったのでしょう。

長岡京では今のところ「市」の正確な場所は特定できていません。しかし右京域での調査では「西市」の存在をうかがわせる資料がいくつも見つかっています。それらは右京六条二坊～七条二坊周辺に集中することからこの周辺に西市があったと考えられています。<sup>すじゃくおおじ</sup>朱雀大路を挟んだ対称位置に「東市」があったとすれば、まさしく今回の調査の東側周辺がそれに相当します。残念ながら推定地付近で行われた調査では東市に関する決定的な発見はなされていませんが、今後大きな進展がみられるかもしれません。

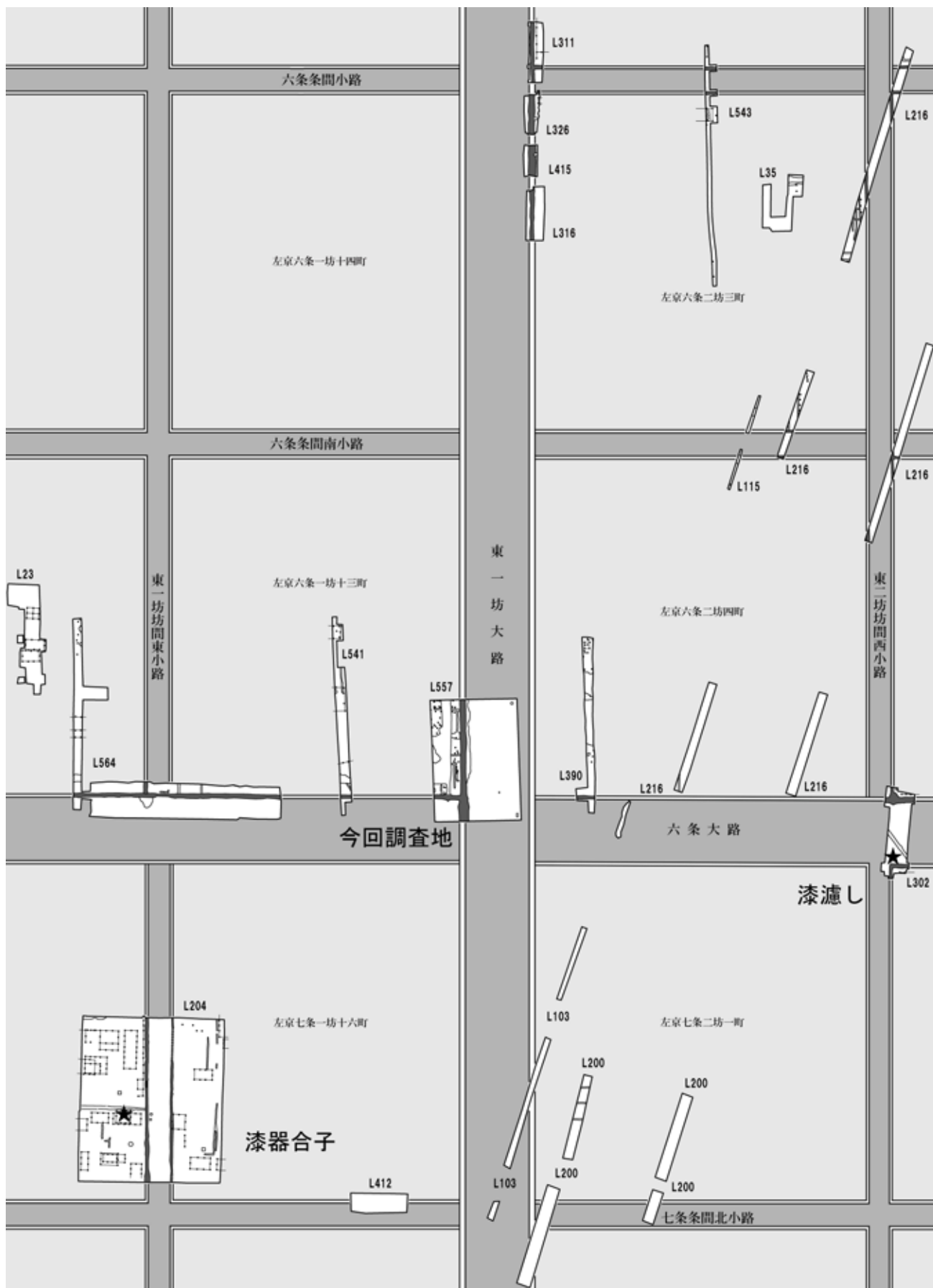
いずれにせよ今回の調査では貴重な遺構・遺物が見つかり合わせて、長岡京の「市」を考える上でも大きな成果が上げられたといえるでしょう。



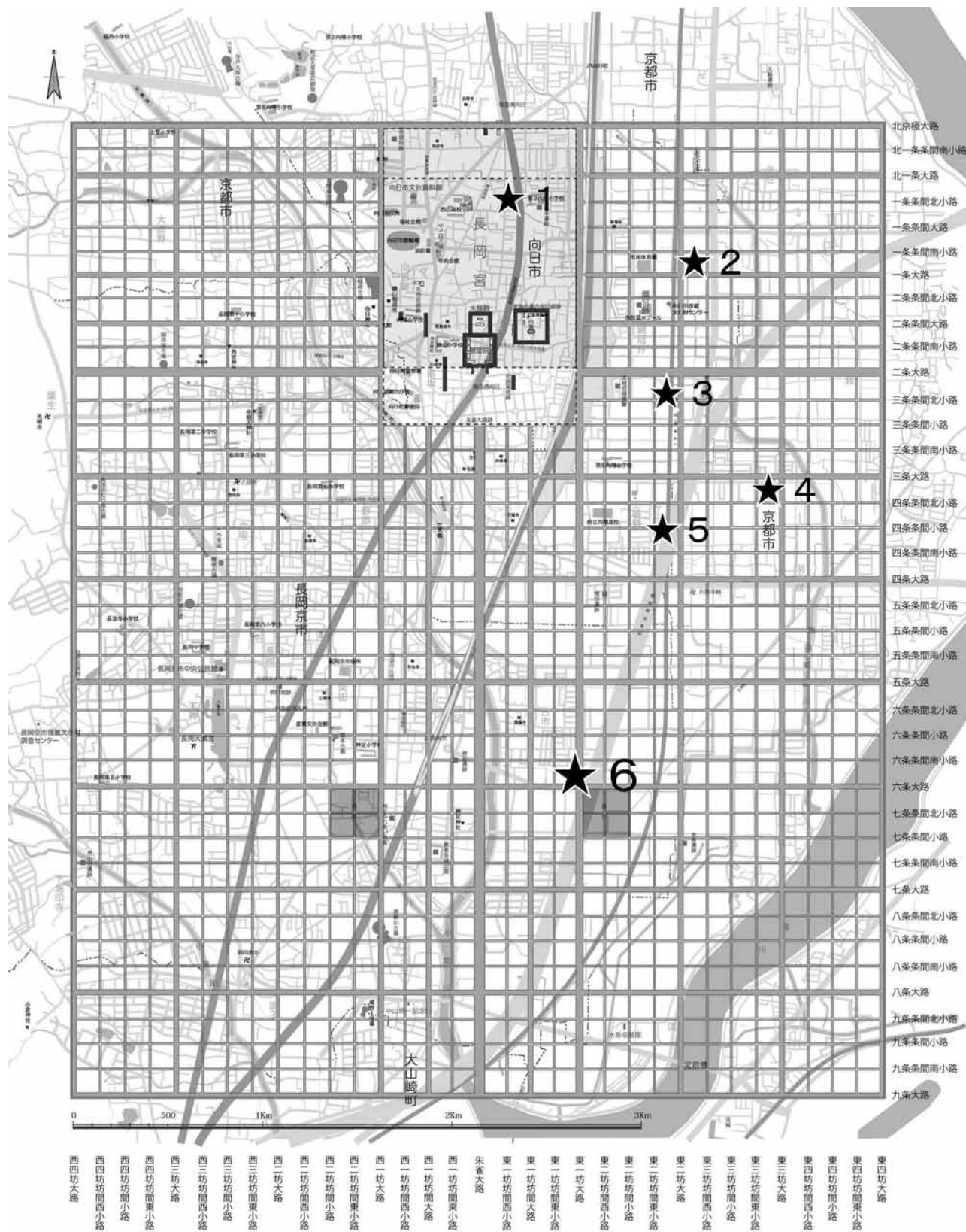
長岡京の大路交差点検出位置



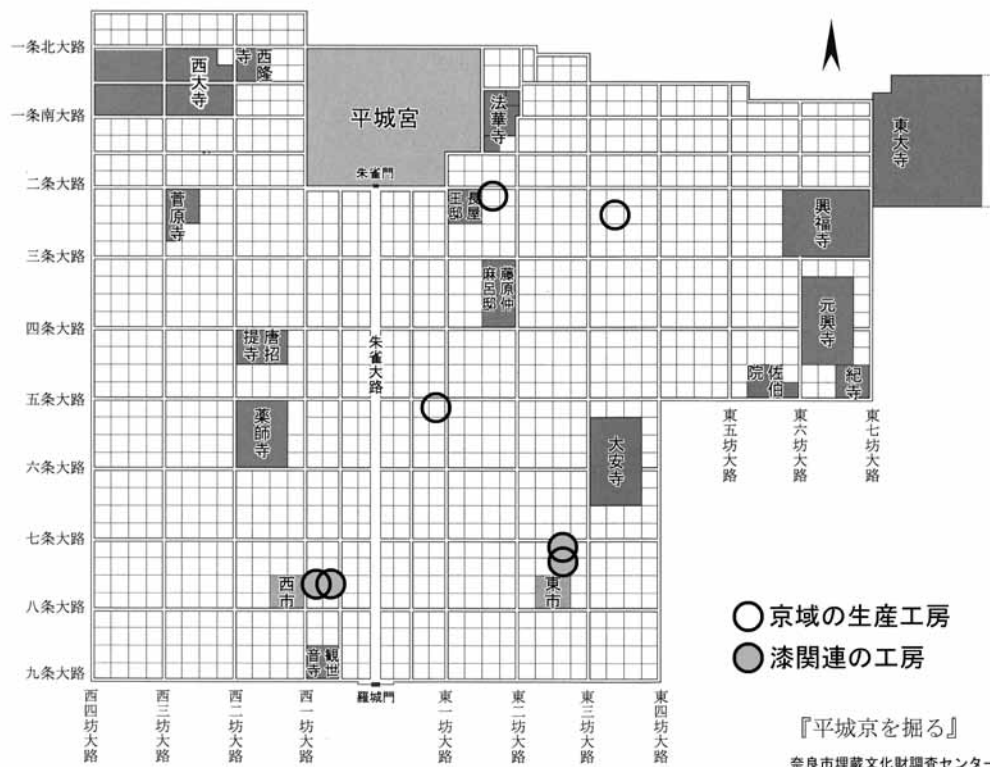
長岡京跡左京第557次調査地平面図 (1/250)



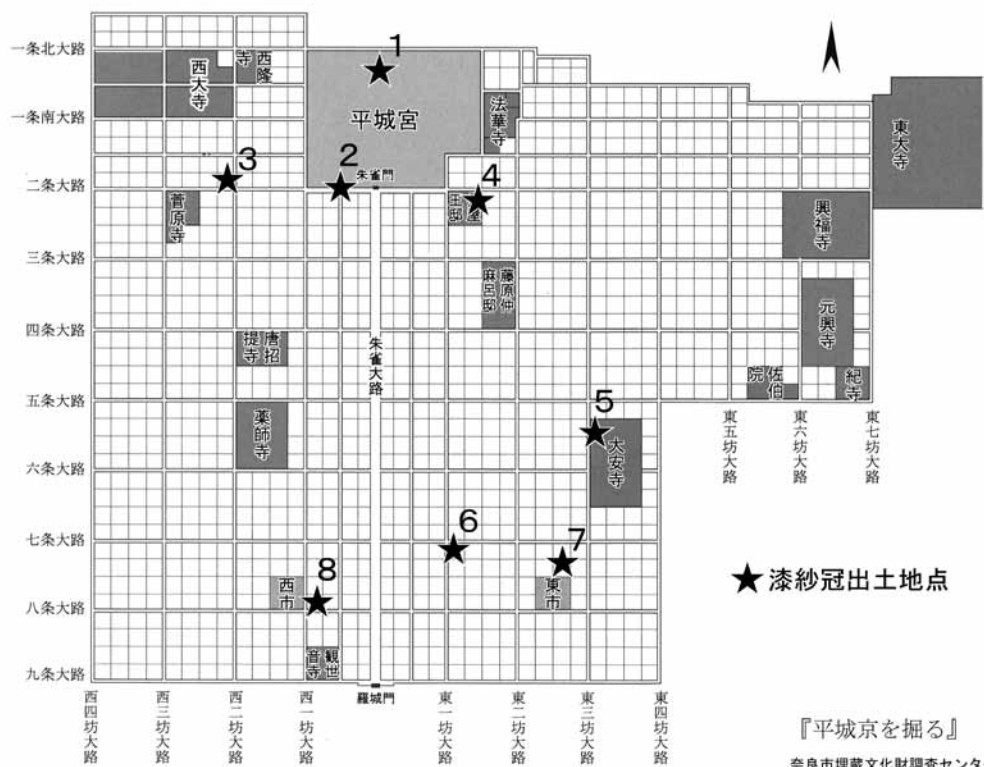
左京第 557 次調査地周辺図 (1/2000)



長岡京漆紗冠出土地点



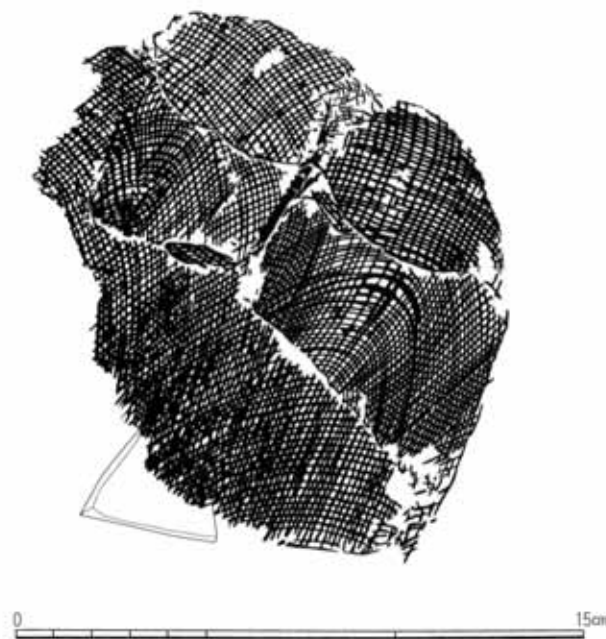
平城京復原図



平城京復原図



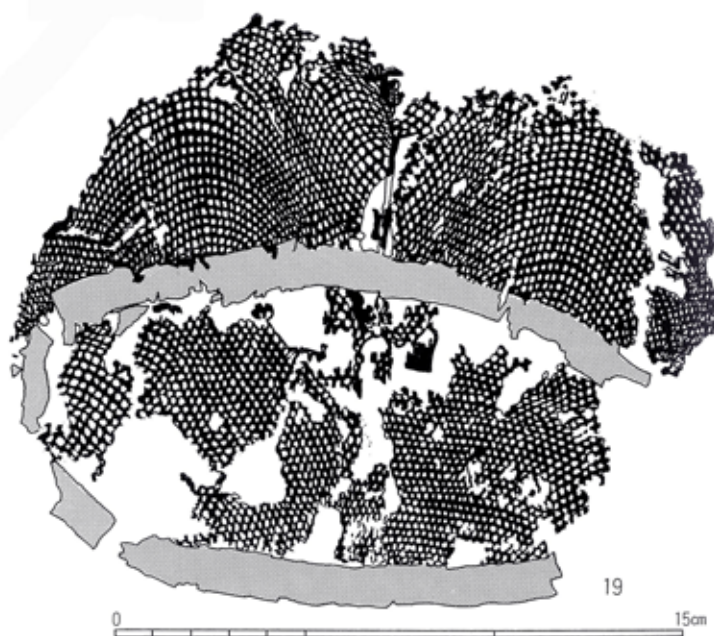
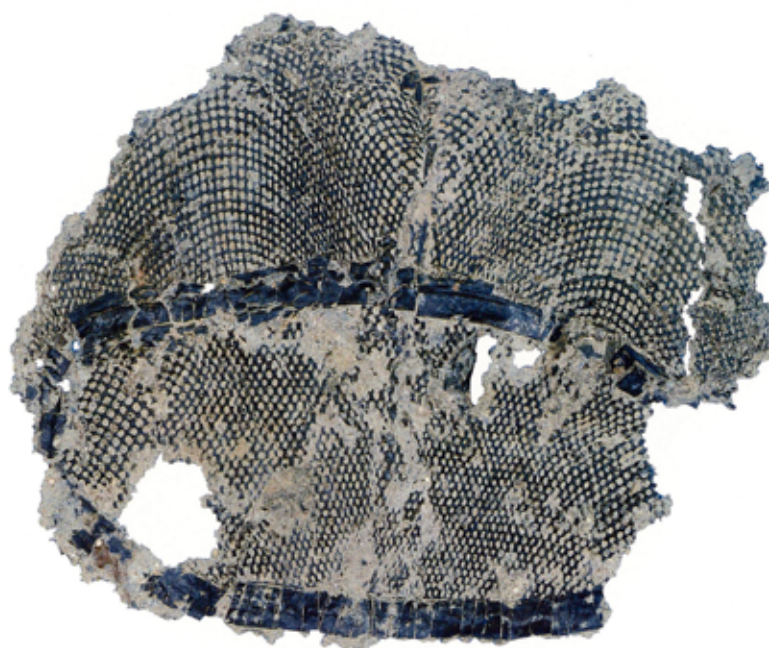
長岡京左京六条一坊十三町出土漆紗冠



宅地内溝 SD15 出土漆紗冠 1:2



平城京左京三条二坊八坪出土漆紗冠



漆紗冠(SD4699出土) 1 : 2

奈良国立文化財研究所『平城京長屋王邸宅跡』1965

日本書紀卷廿九 天武天皇十一年壬午

○三月辛酉詔曰親

王以下百寮諸人。自今已後位冠及襪。經裳莫著。亦膳夫采女等之等之手纏肩巾。並莫服。是日詔曰親王以下至于諸臣被給食封皆止之更返於公。

○六月丁卯男夫始結髮仍著漆紗冠。

新訂増補国史大系『日本書紀』

文武天皇 大宝元年三月

○甲午、

對馬嶋、金を貢く。元を建てて大宝元年としたまふ。始めて新令に依りて官名・位号を改制す。親王の明冠四階、諸王の淨冠十四階、合せて十八階なり。諸臣の、正冠六階・直冠八階・勳冠四階・務冠四階・追冠四階・進冠四階、合せて卅階なり。

(中略)

始めて冠を賜ふこと

を停めて、易ふるに位記を以てす。語は年代曆に在り。また、服制は、親王の四品已上、諸王・諸臣の一位の者は、皆、黒紫。(中略) 皆漆冠・綺帶・白襪・黒革舄。その袴は、直冠以上の者は皆白縛口袴、勳冠以下の者は白脛裳。

延喜式卷十九 式部下

元正朝賀<sub>即位准此</sub>

元日丑一刻。掃部寮設輔以下省掌上座於便處。輔以下就座。省掌置版位。五位以上服禮服。四位已下非服。就版受點<sub>具見儀式</sub>其禮冠者。親王四品已上並漆地金裝。以水精三顆。琥碧三顆。青玉五顆。交居冠頂。以白玉八顆。立櫛形上。以紺玉廿顆。立前後押疊上。其徵者立額上。一品青龍。尾上頭下。右出左顧。二品朱雀。右出左顧。三品白虎。尾上末卷。頭下右向。四品玄武。爲蛭所纏。並右出左顧。立玉者有座并座。居玉者有座無座。諸王一位漆地金裝。(中略) 正五位漆地銀裝。以黒玉十顆。立前押疊上。(後略)

新訂増補国史大系『延喜式』

新日本古典文学大系『続日本紀一』

## 長岡宮・京漆紗冠出土地点

|     | No. | 調査地・出土遺構                                 | 備考・参考文献                        |
|-----|-----|------------------------------------------|--------------------------------|
| 長岡宮 | 1   | 長岡宮第153次調査<br>北辺官衙南部<br>柵SA15307-P3      | 向日市教委『向日市埋蔵文化財調査報告書-第22集-』1987 |
|     | 2   | 左京第501次調査<br>左京一条三坊四町<br>一条大路北側溝SD50103  | 向日市教委『向日市埋蔵文化財調査報告書-第68集-』2005 |
| 長岡京 | 3   | 左京第312次調査<br>左京三条二坊十六町<br>井戸SE31204裏込    | 向日市教委『向日市埋蔵文化財調査報告書-第69集-』2009 |
|     | 4   | 左京第67次調査<br>左京四条三坊十六町<br>井戸SE67B-O 1     | 京都市調査（未報告）                     |
|     | 5   | 左京第71次調査<br>左京四条二坊十一町<br>四条条間小路南側溝SD0254 | 向日市教委『向日市埋蔵文化財調査報告書-第8集-』1982  |
|     | 6   | 左京第557次調査<br>左京六条一坊十三町<br>宅地内溝SD15       | 4点出土                           |

## 平城宮・京漆紗冠出土地点

|     | No. | 調査地・出土遺構                                            | 備考・参考文献                                     |
|-----|-----|-----------------------------------------------------|---------------------------------------------|
| 平城宮 | 1   | 平城宮第5次調査<br>大膳職地区<br>土坑SK219                        | 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅱ』1962<br>平城Ⅱ-2期 塵芥処理土坑 |
|     | 2   | 平城宮若犬養門<br>土手26                                     | 奈良国立文化財研究所調査 未報告                            |
| 平城京 | 3   | 平城京第276次調査<br>右京二条三坊四坪<br>井戸SE503                   | 奈良市教育委員会<br>『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書-平成5年度-』1994    |
|     | 4   | 平城京第329次調査<br>左京三条二坊八坪<br>東二坊坊間小路西側溝SD4699          | 奈良国立文化財研究所『平城京長屋王邸宅跡』1965                   |
|     | 5   | 大安寺第57次調査<br>左京六条四坊二坪<br>井戸SE02                     | 奈良市教育委員会<br>『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書-平成5年度-』1994    |
|     | 6   | 平城京第563次調査<br>左京八条二坊一坪<br>井戸SE11                    | 奈良市教育委員会<br>『奈良市埋蔵文化財調査年報-平成18年度-』2009      |
|     | 7   | 平城京第93・94次調査<br>左京八条三坊十坪<br>八条条間北小路南側溝SD1155        | 奈良県『平城京左京八条三坊発掘調査概報』<br>東市周辺東北地域の調査1976     |
|     | 8   | 平城京第156・168・179次調査<br>右京八条一坊十三坪<br>八条条間南小路南側溝SD1496 | 大和郡山市教育委員会<br>『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』1990   |

－メモ－

# 平安京北郊でみつかった居館

## － 植物園北遺跡の発掘調査から －

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

主任調査員 高野陽子

### はじめに

植物園北遺跡の調査は、平成 23 ～ 25 年度に、新総合資料館（仮称）・教養教育共同化施設（仮称）整備事業に先立ち、実施しました。調査地は、京都市左京区下賀茂半木町にあたり、京都府立大学の構内および付属農場に位置します。調査面積は、平成 23 年度は 2,200㎡、平成 24 年度調査は、6,000㎡の調査を対象とし、全体で 8,200㎡の調査を実施しました。発掘調査では、40 棟以上の奈良～平安時代の<sup>たてあな</sup>竪穴建物や<sup>ほったてばしら</sup>掘立柱建物を検出し、そのなかの一つは 3 面に<sup>ひさし</sup>廂を持つ大型掘立柱建物であることがわかりました。<sup>さんめんびさしたて</sup>三面廂建物は平安京内での調査例は少なく、平安京の郊外でははじめて確認されたものとして大変注目されます。

### 周辺の遺跡と今回の調査地

植物園北遺跡は、京都盆地北部の賀茂川と高野川に挟まれた扇状地上に位置する遺跡です。1974 年の京都市高速鉄道烏丸線の北進工事の際に発見された遺跡で、東西約 2 km、南北約 1.2 km の遺跡範囲をもつ縄文時代から近世にかけての複合集落遺跡です。遺跡の周辺には多くの遺跡が分布しています。遺跡北部の丘陵には、古墳時代中期の<sup>えんぶん</sup>円墳 2 基からなる幡枝古墳群や、ケシ山古墳群、本山古墳群、西山古墳群などの後期群集墳が分布し、木野窯・栗栖野窯（瓦窯）、深泥池東岸窯（須恵器窯）、ケシ山窯（炭窯）など、飛鳥時代～平安時代にかけての<sup>がよう</sup>瓦窯や<sup>すえき</sup>須恵器、<sup>りよくゆうとうき</sup>緑釉陶器の窯、<sup>かま</sup>炭窯など、多くの生産遺跡が営まれています。現在、調査地の東に接する下鴨中通は近世の鞍馬街道であり、丹波や近江・北陸に抜ける重要な交易路として中世・古代にも遡る道と考えられています。こうした道を通じて、北山の丘陵で生産された土器や瓦が平安京や寺社に運ばれたと推定されます。また、調査地の北西約 1 km には上賀茂神社（賀茂別雷神社）が、南西には下鴨神社（賀茂御祖神社）が近在し、奈良～平安時代には賀茂祭が多くの人々を集めて賑わいをみせたようです。

ところで、奈良時代中頃にはすでに両賀茂社が『続日本紀』にみえることなどから、8世紀後半には、現在の調査地周辺を含む賀茂川と高野川に挟まれる地域に、賀茂氏が勢力基盤を置いていたと考えられています。賀茂社の祭神は、9世紀初頭に正一位の神階を与えられ（807年、『日本紀略』）、賀茂氏はその管掌氏族として朝廷内の神祇に関わり勢力を拡大する時期にあたることから、古代におけるこの地域の開発主体の有力な候補とみることができます。

さて、植物園北遺跡では、おもに遺跡の北部から東部を中心にした過去40回以上の発掘調査によって、弥生時代末期から古墳時代前期の竪穴建物が100棟以上確認され、北山城を代表する大規模な集落遺跡であることがわかっています。今回の調査地は、植物園北遺跡の南部にあたり、奈良時代から平安時代の建物を中心とした多くの遺構が見つかりました。周辺では、調査地北部の京都コンサートホール敷地の調査でも奈良時代から平安時代にかけての建物群が検出され、遺跡南部を中心に、同時期の集落が大きく広がることがわかりました。

### 遺構の変遷

今回の調査では、古墳時代前期から江戸時代にいたる各時期の遺構が見つかりました。調査地北部の府立大学農学部農場内で設定した1～7区では、古墳時代前期前葉の土坑1基や柱穴、古墳時代後期の竪穴建物1基、飛鳥時代末期から奈良時代初期の土器棺2基、奈良時代前期前半の竪穴建物6棟、奈良時代末期から平安時代中期の掘立柱建物38棟や土坑や溝群、室町時代から江戸時代の掘立柱建物2棟と土坑群、江戸時代の流路1条などを検出しました。また、調査地南部の大学構内に設定した8区・9区は、下鴨半木町遺跡に含まれ、鎌倉時代から室町時代の落ち込み1基、室町時代の流路1条、江戸時代の流路1条などが見つかりました。

〔古墳時代〕 古墳時代前期の土坑や後期の竪穴建物が見つかりました。過去の調査では、調査地の北に約150mの地点（第11次調査）で前期の溝（幅約4m）が確認されましたが、今回の調査によって前期の遺構の広がりがさらに南に拡大することがわかりました。後期の竪穴建物は、南部の6区で見つかりました。調査地南方の約300mには、江戸時代に「王塚」と呼ばれた後期の半木町塚跡があることから、後期の集落は遺跡のさらに南方で拡大する可能性が出てきました。

〔飛鳥時代～奈良時代〕 飛鳥時代末期の遺構として土坑や土器棺墓などがありますが、本格的な集落形成がはじまるのは奈良時代以降で、2～3棟のグループを形成する竪穴建物6基が見つかりました。奈良時代前半には、竪穴建物を中心とした集落であることがわか



りました。竪穴建物の使用例では、山城のなかでも最も新しい時期のものです。

〔平安時代前期前葉〕 平安時代前期には、大きく3段階の建物群の推移をみることができます。最初の段階は、平安時代前期前葉（9世紀前葉）で、南北に主軸<sup>しゅじく</sup>を揃えた掘立柱建物群が建てられるようになります。南北に主軸をあわせる掘立柱建物群は、東に想定される古代の道に主軸を合わせたものである可能性があります。こうした建物配置にみる画期は、平安京遷都<sup>せんと</sup>（794年）後に道の整備が行われ、一帯の開発が大きく進められたことを示すと考えられます。

〔平安時代前期中葉〕 平安時代前期中葉（9世紀中葉）は、最も多くの建物が確認される段階で、三面廂建物<sup>さんめんびさしたてもの</sup>もこの時期に造営されたことがわかりました。三面廂建物 S B 5130 の周囲には、同時期の建物は確認されず、一定の空間が確保され、前庭<sup>ぜんてい</sup>が設けられていたとみられます。北側には南北棟の掘立柱建物 S B 5005 や S B 5025、S B 5085 などが見つかり、同時の主要建物が主軸を揃えて南北線上に並ぶことがわかりました。また、北西部に設置された掘立柱塀<sup>ほったてばしらべい</sup> S A 5150 は、主要建物と雑舎域<sup>ざっしや</sup>を区分した目隠し塀<sup>めかくべい</sup>とみられます。三面廂建物の東側には、工房的性格をもつ小型の竪穴建物 S H 2005 が見つかりました。さらに三面廂建物の北 80 m の地点で見つかった掘立柱建物 S B 4050 は、三面廂建物の身舎<sup>もや</sup>と同様の規格をもち、同一の集団によって営まれた建物群と考えられます。

〔平安時代前期後葉〕 平安時代前期後葉には、北西から南西へ流れる溝 S D 5001 が、掘立柱建物群を大きく削平して掘削されており、周囲の景観が大きく変わる時期です。溝 S D 5001 は、洪水性の堆積層を新たに掘削したもので、溝が形成される前の9世紀後葉～末の段階に、大きな水害が生じたと考えられます。平安時代には、賀茂川（鴨川）は降雨により何度も氾濫<sup>はんらん</sup>を起こしていますが、その中でも貞観 13（871）年の大台風による風水害は最も規模の大きいものであったようです。その時期は、S D 5001 の時期とおおよそ一致しており、この水害ののちに溝 S D 5001 が掘削されたと考えられます。水害後は、被害が大きかった北半部は居住に適さなかったようで、新たな建物群は南部を中心に造営されるようになります。三面廂建物 S B 5130 についても、この水害によって浸水するなどの被害を受けたものと想像されます。

〔平安時代中期前葉〕 平安時代中期には、新たな建物の造営は限られたものとなり、中期前葉（10世紀中葉）に造営された掘立柱建物 S B 6060 が調査地で確認できる平安時代の最後の建物となります。

〔鎌倉時代～室町時代〕 鎌倉時代～室町時代（12世紀末～15世紀）にかけて、掘立柱建物 S B 3006 や S B 5126 が造営され、中世にもわずかながら居住域としての土地利用があったことがわかりました。

〔江戸時代〕 調査地を東から西へ流れる江戸時代の流路 S R 5125 が見つかりました。この流路は、近世の愛宕郡上賀茂村と下鴨村の境界とされた乙井川と推定されます。流路からは近世後期の染付そめつけや寛永通宝かんえいつうほうが出土しました。乙井川は、近代まで継続して流れていたもので、S R 5125 の北約 25m の地点 ( 2 区と 5 区の間 ) に東西に通る現在の京都市用水路に整備されたとみられます。

### 三面廂建物とその性格

今回の調査で見つかった建物群は、おもに平安時代前期のものですが、なかでも特に注目されるのは、5 区南部でみつかった三面廂建物 S B 5130 です。S B 5130 は、身舎もやの柱間はしらまは桁行 5 間、梁間けたゆき2 間の規模をもち、南と東西の三面に廂はりまをもちます ( 東西 16.4 m、南北 7.8 m )。身舎は、桁行 5 間 ( 11.25 m )、梁行 2 間 ( 4.8 m ) の東西棟です。廂ひさしの出は、南廂が 3.0 m ( 10 尺 )、東廂・西廂はそれぞれ 2.55 m ( 8.5 尺 ) を測り、南廂をより広くとることが特徴です。建物主軸は、北から 4 度東に振り、廂を含めた建物全体の床面積は 126.4㎡を測る大規模な建物です。

廂付建物は、都城や官衙とじょう かんがを中心にみられる建物です。廂の数は、建物の格式かくしきの上下を示し、そこで行われる儀礼の内容や使用する人の身分序列みぶんじょれつを反映するとみる学説があり、三面廂建物は四面廂建物について格式の高い建物とされます。類例は少なく、平城京では、掘立柱建物に占める三面廂建物の比率は約 0.39% ( 全掘立柱建物 2,585 棟のうち 10 棟、四面廂 0.35% ) と限られ、約一町規模の上級貴族の宅地いっちょうの主屋おもやに用いられる例が多いとされます。廂付建物が増加する平安京では、「齋宮」邸とされる右京三条二坊十五・十六町や右大臣藤原良相邸とされる西三条第 ( 右京三条一坊六・七町 ) など約 10 例 ( 表 ) を数え、一町四方や四分の一町以上の宅地の主屋域に用いられます。今回検出した三面廂建物 S B 5130 は、平安京の京域外におけるはじめての例ですが、規模は大きく、右京四条二坊の淳和院につぐ規模をもちます。

調査地では、建物主軸を正方位せいほういにあわせて造営された掘立柱建物群が 9 世紀前半に出現し、その後、9 世紀中葉に三面廂建物を含めた多くの建物群が新たに造営されたとみられることから、平安京遷都後に大きく開発されたと考えられます。今回の調査では、倉庫群に対応するような掘立柱建物群、墨書土器ぼくしよどきや木簡もっかんなどの官衙的性格を示す遺構や遺物はほとんど確認されていません。また、出土遺物のなかでは、施釉陶器せゆうとうきの出土比率は平安京内に比べて少ない一方、相対的に須恵器すえきの比率が高く、製作手法に地域色がみられることから、調査地一帯は、平安遷都以後、この地域に勢力基盤を置いた氏族が再開発を担ったものと考えられます。三面廂建物はそうした開発氏族の有力者の居館きょかんとして造営された可能

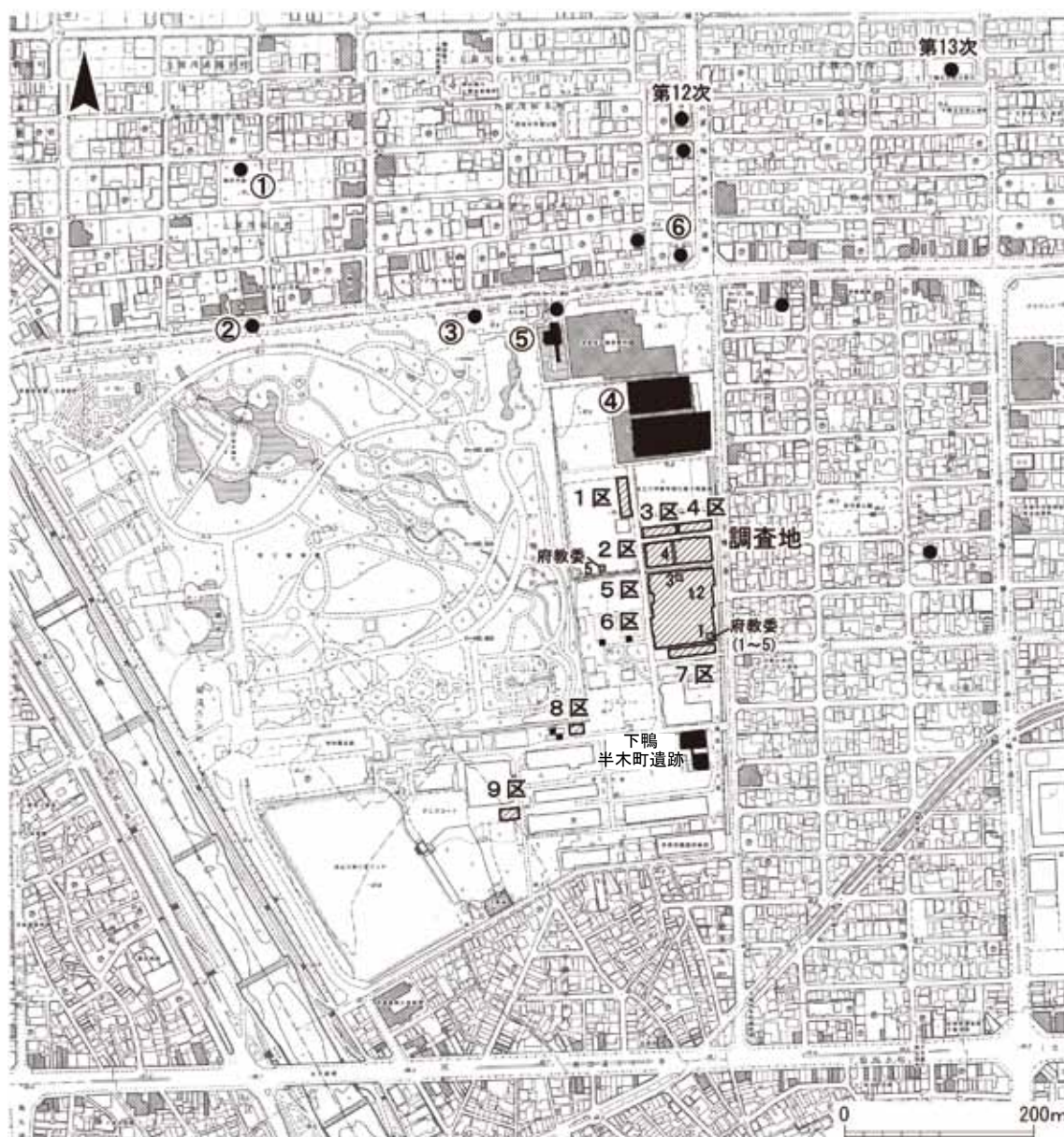
性を指摘することができます。

今回の発掘調査では、平安京京域外における平安時代前期の地域開発の在り方を具体的に知ることのできる貴重な資料を得ることができました。



第1図 調査地位置図



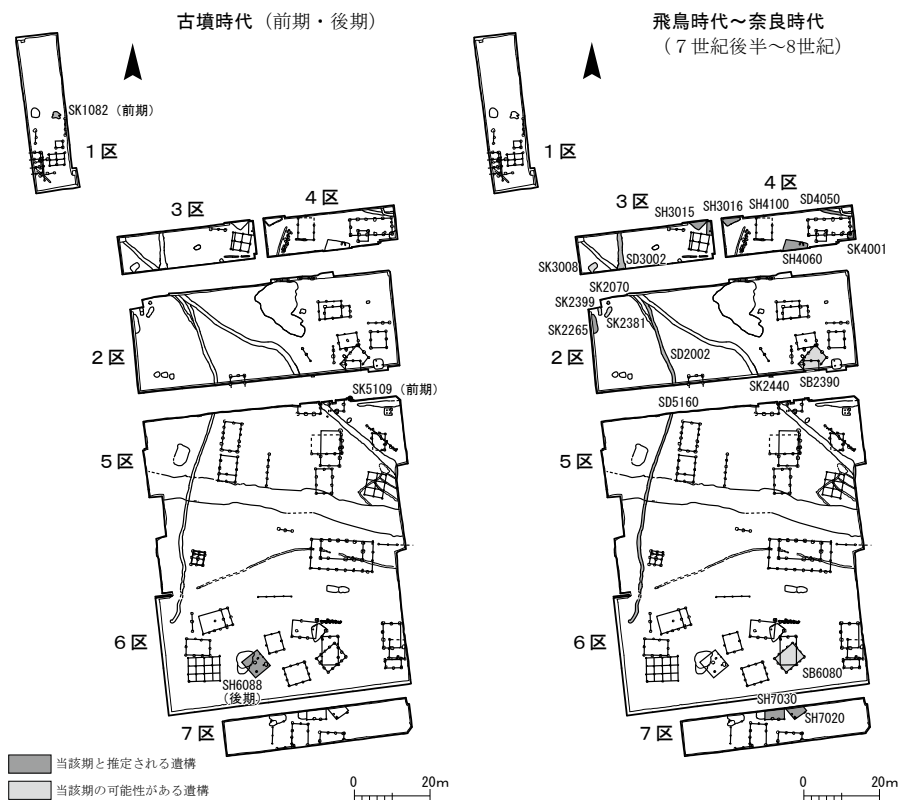


- ①第2次 平安時代土坑群
- ②第4次 古墳時代前期の竪穴建物、平安時代中～後記の掘立柱建物
- ③第6次 古墳時代前期の溝、平安時代中期の溝、鎌倉時代の土坑
- ④第9次 縄文時代の土器棺、古墳時代後期の竪穴建物、奈良～平安時代の掘立柱建物
- ⑤第11次 古墳時代前期の溝、平安時代の柱穴群か
- ⑥第18次 平安時代中期の掘立柱建物、柱穴群

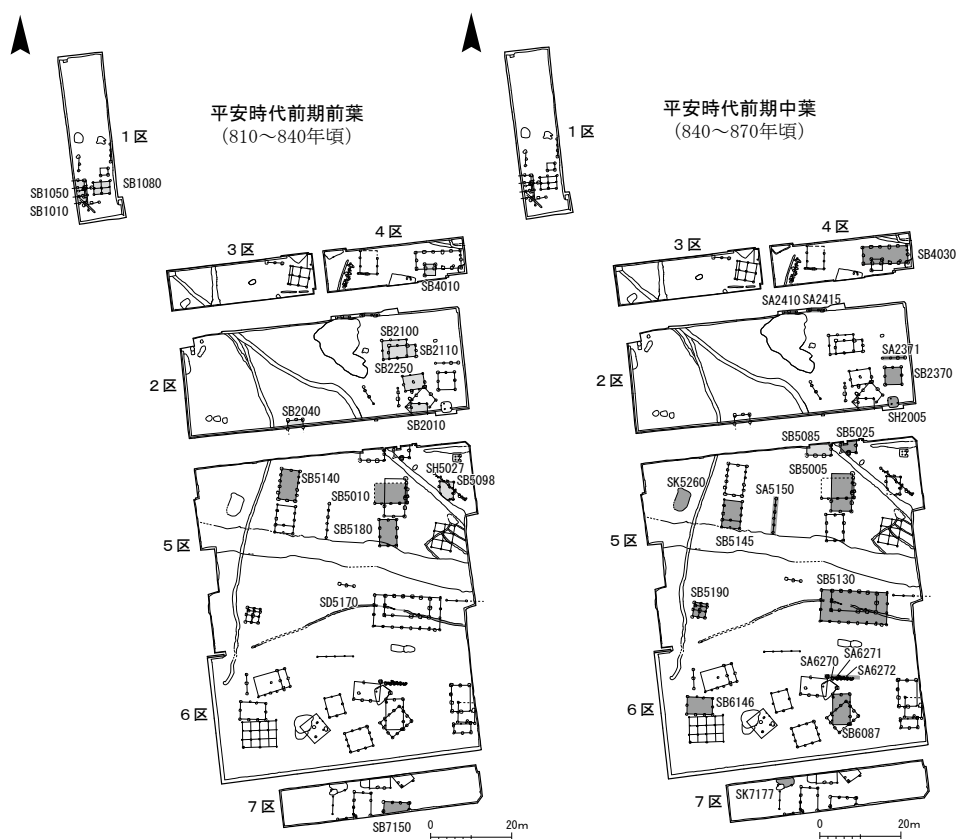
第2図 周辺の調査



第3図 調査区配置図

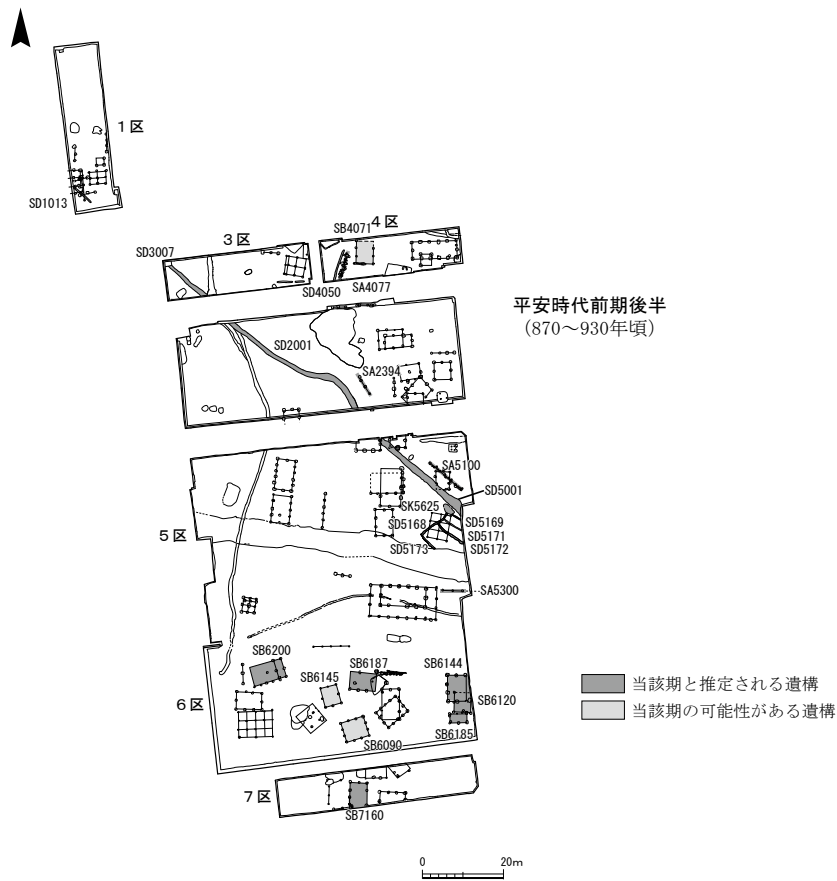


第4図 遺構変遷図（1）

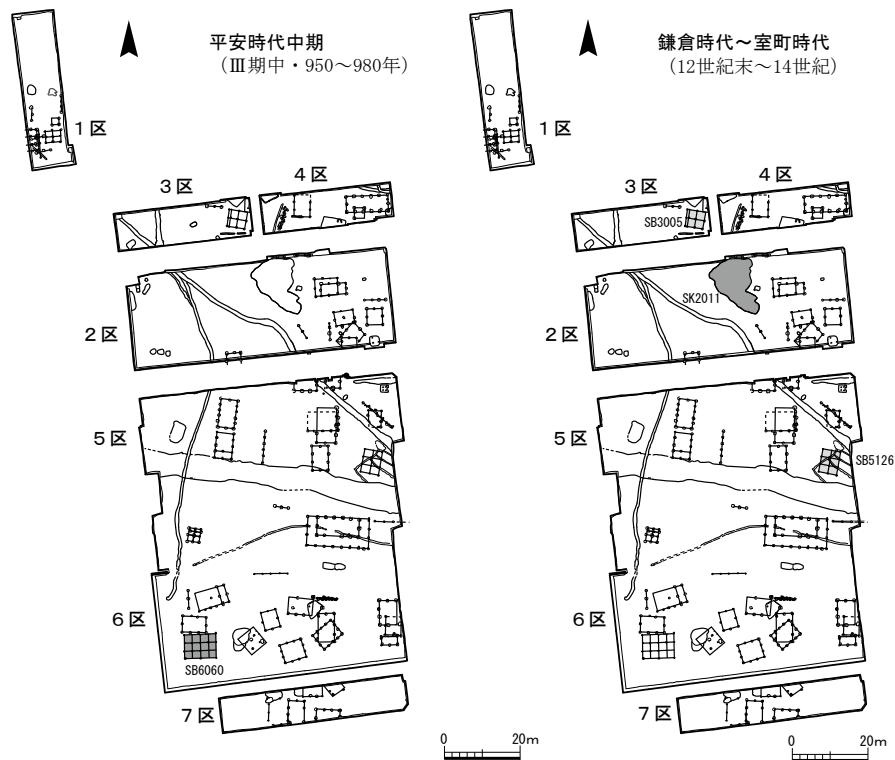


第5図 遺構変遷図（2）

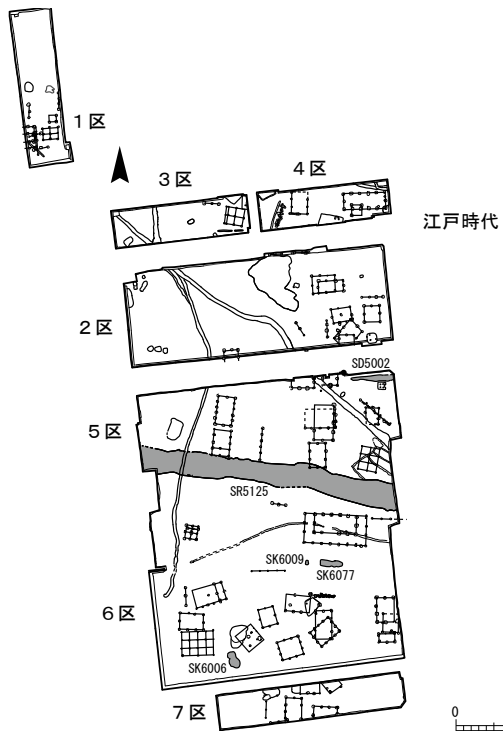




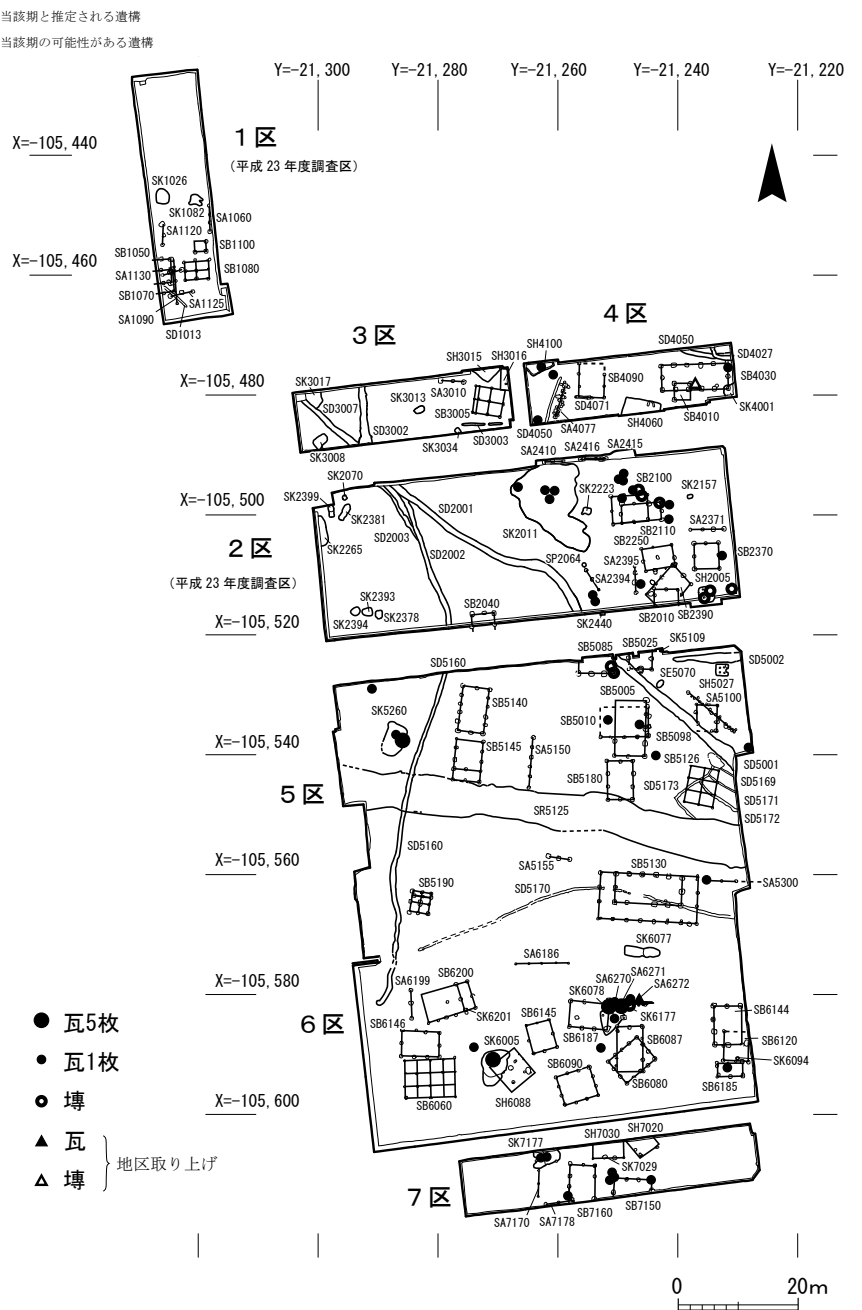
第6図 遺構変遷図(3)



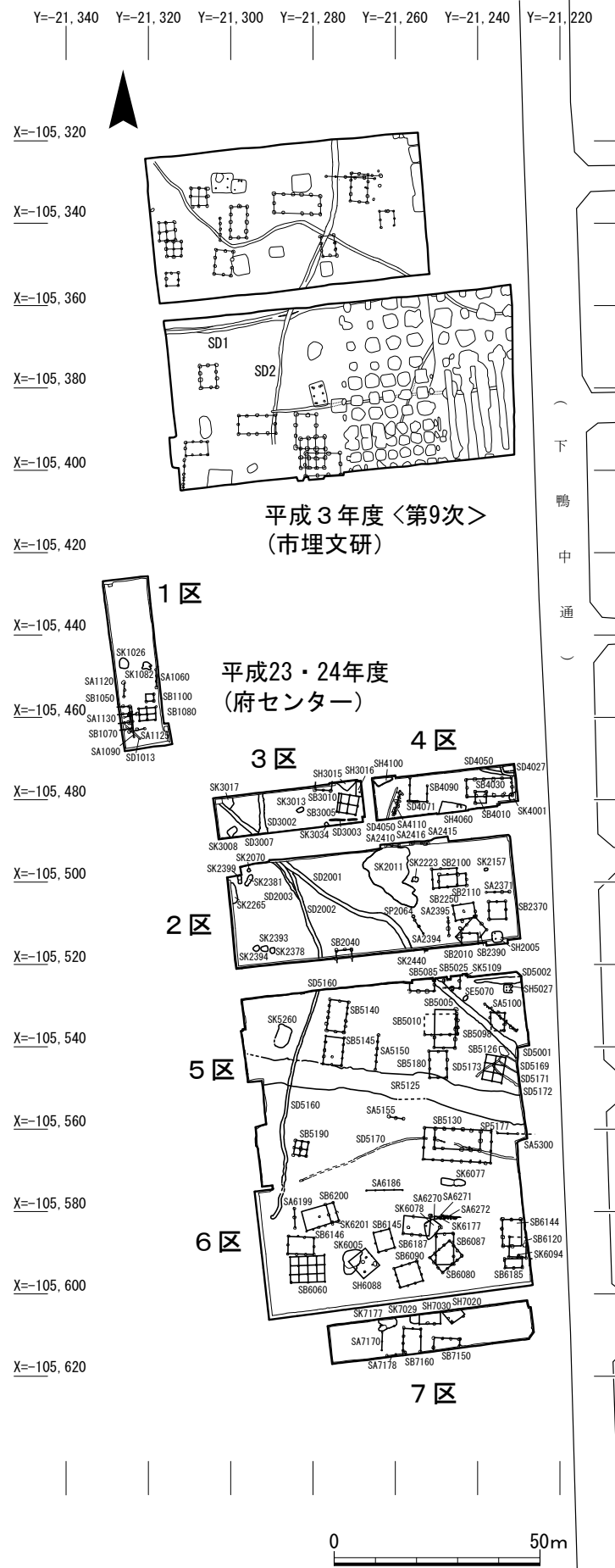
第7図 遺構変遷図(4)



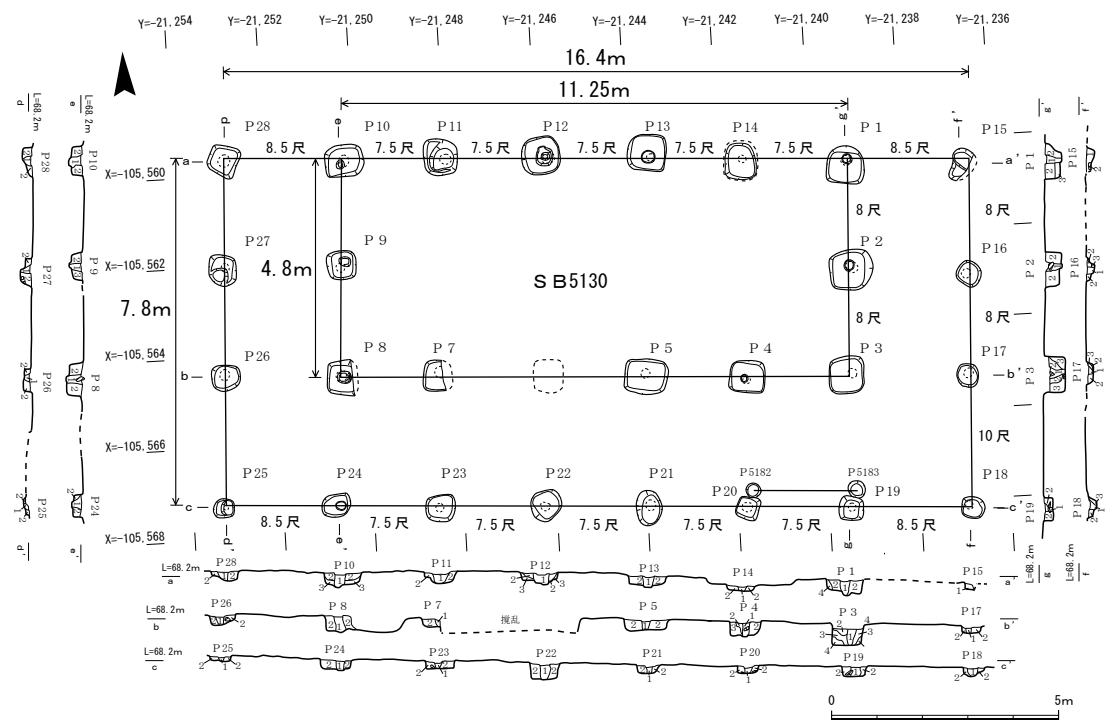
第8図 遺構変遷図(5)



第10図 瓦類出土地点



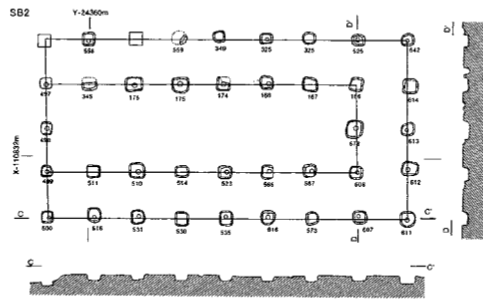
第9図 植物園北遺跡遺構位置図



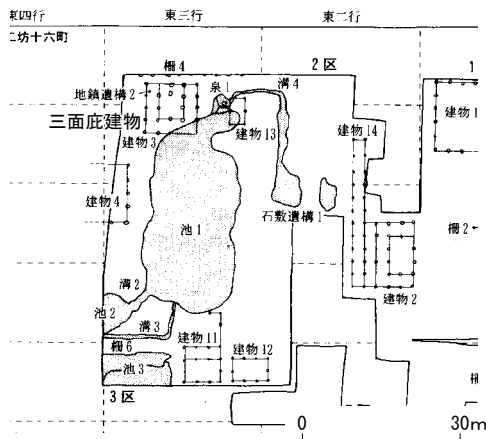
第 11 図 三面廂建物 S B 5130 の規模と規格

|   | 位置                          | 所在地                   | 遺構名        | 棟<br>方向 | 建物規模                        | 時期                | 身舎桁行 |                      | 身舎奥行 |                      | 廂                                                  | 床<br>面積 |
|---|-----------------------------|-----------------------|------------|---------|-----------------------------|-------------------|------|----------------------|------|----------------------|----------------------------------------------------|---------|
|   |                             |                       |            |         |                             |                   | 柱間   | 規模                   | 柱間   | 規模                   |                                                    |         |
| 1 | 右京四条二<br>坊(淳和院)             | 右京区<br>西院院町・<br>西淳和院町 | SB2        | 東西      | 19.5 × 9.8 m<br>8 間 × 4 間   | 9 世紀後半            | 7 間  | 柱間 2.4 m             | 2 間  | 柱間 2.4 m             | 南北・東<br>南北柱間 2.5 m (8.3<br>尺)<br>東柱間 2.7 m (9 尺)   | 191.1   |
|   |                             |                       | SB4        | 東西      | 15.2 × 9.6 m<br>6 間 × 4 間   | 9 世紀後半            | 5 間  | 柱間 2.4 m             | 2 間  | 柱間 2.4 m             | 南北・西<br>南北柱間 2.4 m (8<br>尺)<br>西柱間 2.7 m (9 尺)     | 145.9   |
| 2 | 植物園北遺<br>跡                  | 左京区<br>下鴨半木町          | SB<br>5130 | 東西      | 16.4 × 7.8 m<br>7 間 × 3 間   | 9 世紀中～<br>後葉      | 5 間  | 11.25 m<br>7.5 尺     | 2 間  | 4.8 m<br>8 尺         | 東西・南<br>東西 2.55 m (8.5 尺)<br>南 3.0 m (10 尺)        | 127.9   |
| 3 | 右京三条三<br>坊十町                | 右京区<br>西ノ京桑原<br>町ほか   | SB31       | 東西      | 13.8 × 7.8 m<br>6 間 × 3 間   | 9 世紀前半            | 4 間  | ※ 9.1 m              | 2 間  | ※ 4.8 m              | 東西・南<br>東西 2.25～2.4 m<br>(7.5 尺)<br>南 3.0 m (10 尺) | 107.6   |
| 4 | 右京三条二<br>坊十六町<br>(斎宮邸)      | 中京区<br>西ノ京東中<br>合町    | 建物 3       | 南北      | 9.7 × 9.4 m<br>4 間 × 4 間    | 9 世紀末～<br>10 世紀前葉 | 3 間  | 柱間 2.25 m<br>7.5 尺   | 2 間  | 柱間 2.25<br>7.5 尺     | 東西・南<br>東・南 9 尺、西 8<br>尺                           | 91.2    |
|   |                             |                       | 建物 2       | 南北      | 12.1 × 6.95 m<br>5 間 × 3 間  | 9 世紀末～<br>10 世紀前葉 | 5 間  | 柱間 2.4 m             | 3 間  | 柱間 2.4 m             | 南北・西                                               | 84.1    |
| 5 | 右京六条三<br>坊四町                | 右京区<br>西院溝崎町          | —          | 東西      | ※ 12.4 × 7.2 m<br>5 間 × 3 間 | 9 世紀後半            | 3 間  | 柱間 2.4 m             | 2 間  | 柱間 2.4 m             | —                                                  | 89.3    |
| 6 | 右京二条三<br>坊十五町               | 右京区<br>花園春日町          | SB6        | 東西      | 12.8 × 6.4 m<br>5 間 × 3 間   | 9 世紀末～<br>10 世紀中  | 3 間  | 7.2 m<br>8 尺等間       | 2 間  | 4.8 m<br>8 尺等間       | 東西・南<br>2.7 m (9 尺)                                | 81.9    |
| 7 | 右京二条三<br>坊一町                | 中京区<br>西ノ京中御<br>門町    | SB8        | 南北      | 9.1 m × 8.4 m               | 9 世紀初             | 3 間  | 4.2 m<br>14 尺        | 2 間  | 6.3 m<br>21 尺        | 東西・南<br>2.4 m (8 尺)                                | 76.4    |
| 8 | 右京三条一<br>坊六町<br>(藤原良相<br>邸) | 中京区<br>西ノ京星池<br>町     | 建物 1       | 南北      | ※ 8.5 × 8.6 m<br>4 間 × 4 間  | 9 世紀後半            | 2 間  | 柱間<br>1.98～2.02<br>m | 3 間  | 柱間<br>1.96～2.24<br>m | 東西・南<br>身舎・東廂 6.5 尺、<br>南廂 7.5 尺                   | 73.1    |
| 9 | 右京六条一<br>坊十二町               | 下京区<br>中堂寺南町<br>ほか    | —          | 東西      | 6 間 × 4 間<br>(略図のみ)         | 平安前期              | 5 間  | —                    | 2 間  | —                    | 南北・東                                               | —       |

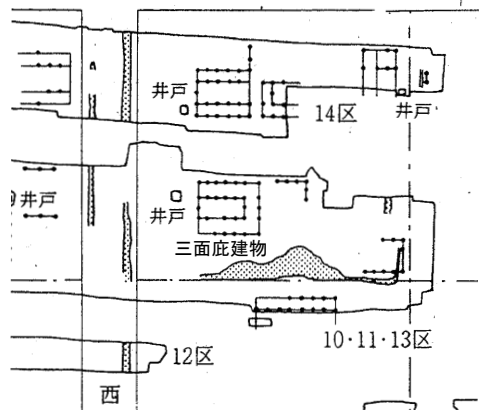
表 平安京内における三面廂建物の類例



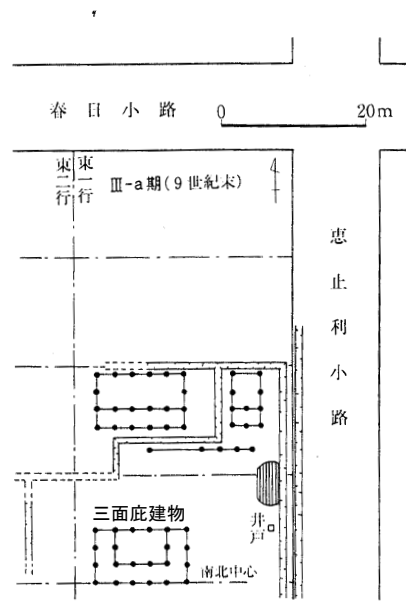
①右京四条二坊（淳和院跡） 0 7m



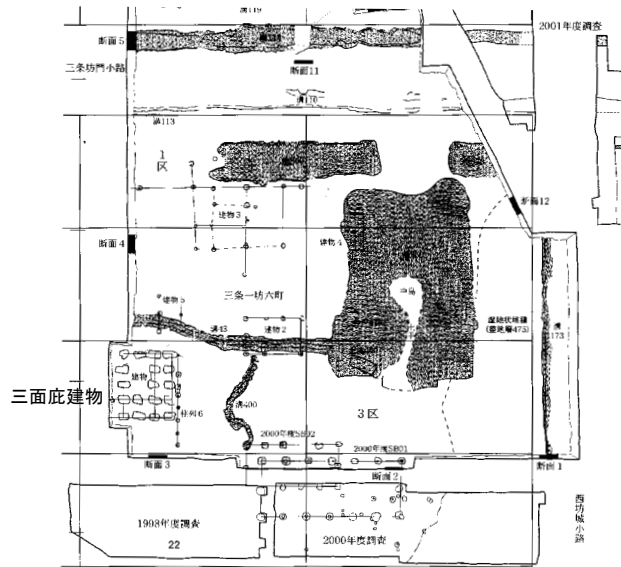
②右京三条二坊十五町・十六町（「齋宮」邸宅） 0 30m



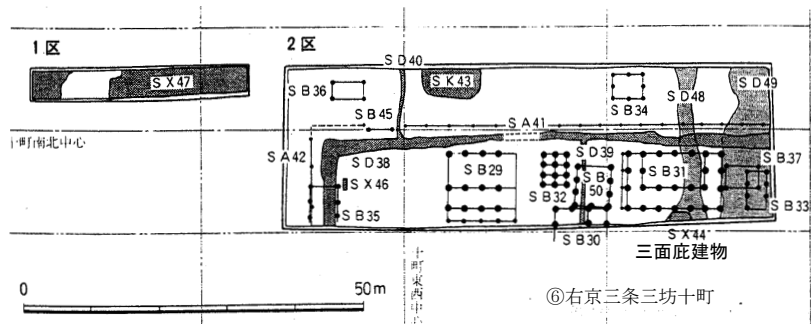
④右京六条一坊 0 50m



③右京二条三坊十五町



⑤右京三条一坊六町・七町（西三条第跡） 0 20m



⑥右京三条三坊十町

第12図 平安京内における三面廂建物の類例





第 13 図 近世乙井川の流路復元



写真 三面廂建物の検出状況（南から）



公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナー、小さな展覧会などの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075) 933-3877 (代表) Fax (075) 922-1189